

LIBRE

紡がれるの物語

秋月あきら

紡がれる因縁

旅に出る

旅の目的？

ただ飽きた、そんなだけ

自分の未来は自分で築け……？

俺は今の事で手一杯だ

俺の名前はジエイク、プロのハンターだ（自称だが）。

そこで、俺は相棒のクインつてのと一緒に旅をしてるんだが、俺は剣、そのクインは主に魔法を担当している。そのためクインは古代文明にも精通している……らしい。実際どのくらい詳しいのか知らない。

ハンターつてのは簡単に説明すると、人間に害を及ぼす奴らをやっつけたり捕獲したりする仕事だ。数ある仕事の中でも、五本、いや三本の指に入る危険な仕事とされている。

ハンターつてのはぶつーは、狩る相手によって専門のハンターがいるもんだが、俺らは依頼さえあれば何でも狩る、時にはハンター家業とは関係ない仕事もやる。要するに金さえ貰えれば、なんでもやる。

まあ最近じゃあ、俺らみたいになんでもこなすハンターが増えてきている。時代の流れってやつか？

で、まあ、今は何してるかっていうと……実は……まあその……なんだ……相棒にはデカイ声じゃ言えないんだが……迷った……道に迷っちゃまった。

第一章 迷いの森

二人の若者は森の中にいた。

アニスの村まではあと、どのくらいだろうか？ この森に入ってから、どのくらい歩いたのだろうか？

二時間、いや三時間くらいか 実を言つと一日以上この森の中にいる。本来であれば一時間とかからずに抜けることのできる森なのだが……？

そのためであろうか、二人の若者は少し疲れた足取りで無言のまま歩いている。

そして最初に話を切り出したのはジェイクだ。

「よし、休憩にしよう」

「また……ですか？ さつき休んだばかりですよ」

とクインがジェイクを上目遣いで見つめ、少し呆れた口調で言う。

「………………。こいつ気づいてる……俺が道に迷ったことを」

「……正直に言ってください、それがあなたのためになるということですよ」

クインは不敵な笑みを浮かべ視線を落とした。

「……っ何が？（絶対気付いてる……ヤバッ！）」

「とぼけないでください！」

クインが怒るのも当然だ。なぜなら、この森に入るきっかけを作ったのはジェイクの『近道をしよう』という言葉が原因だからだ。

「そーいえば、さっきつから、同じような景色が続くなあ……ははは（これ以上はヤバイー！）」

と、わざとらしく言ったのがまずかった。

「……フツ、とぼけないでください！ 道に迷ったなら、迷ったとはつきり言ったらどうですか！！」

クインはそーとー頭にきているらしく、それに押されたジェイクは、申し訳なさそうに頭を下げた。

「……すまん……迷った。でもなあー、分かってたんだったら早くフォローしろよ！ オマエの役目だろそーゆーの」

と、言つて食つて掛かったが、それに対してクインは少し皮肉を込めてこう言った。

「だって、ジェイクが言ったんですよ、『この森なら前に来た事がある、黙つて俺に付いて来い』つて、僕はクインが『黙つて』つて言ったから、そうしたまです」

「はあ！ そんなの言葉の綾だろ！！」

「わかつてました」

「性格悪いぞ……オマエ」

「あなたと付き合うようになってからです」

沈黙が二人を包み込んだ。

「……ふ、はははは！」

「……フッ」

沈黙によって冷静さを取り戻した二人は、今のケンカが莫迦らしく思えて思わず笑ってしまった。

少しはにかんだ表情をするクイン。そして、何事もなかったかのようにジェイクが、

「……で、どーする？」

「……どうしましょうか？」

そのとき、遠くのほうで女性の悲鳴が！

「きゃああーっ！！！」

「……………！！！」

「行きましょう！」

「そうだな、道に迷ってるよりまだ、行くぞ！」

二人は悲鳴が聞こえた方向へと森の中を駆け抜けて行った。

二人の前に現れた女性は女性というより、まだ、少しあどけなさを残す少女と言ったほうがいいだろう。

少女は少し安堵の表情を浮かべ、

「あ、あの、助けてください。あなたたち、あの、強そうだし魔物に追われていて、あの、お願いします」

少女の言葉からは焦りと動揺の色が見受けられる。

ジェイクはまあまあ落ち着けっ感じて少女に歩みより尋ねた。

「で、その魔物ってのは？」

「あ、あの、後ろに……」

少女はジェイクとクインの後ろを指差した。ジェイクとクインが驚いた表情をして後ろを振り向くとそこにはモンスターが！！

モンスターは緑色のゴツゴツした筋肉質の巨体を上下に揺らし三人を睨みつけている。

クインはモンスターを一瞥し、そのモンスターが何なのかを瞬時に判断した。

「ゴブリンのようですね、それも変種のような。僕の魔法を使えば楽勝です……と言いたいところなんですけど、実は、昨日から変だなあと思っていたんですけど……その、なんですかね……」

「早く言えよ」

「この森、結界が張っているらしくって……魔法が封じられていて、でも一回くらいなら使えるかも……ははは」

モンスターを前にして魔導士が魔法を使えないとはただの人同然、もしくはそれ以下の戦力にしかならない。

「使えねえーなんだよそれ。わかった、ここは俺にまかせろ！」

ジェイクは腰に掛けてある鞘から剣を抜きモンスターにその刃を向けた。

モンスターは動じる様子を全く見せずジェイクを獣のような目つきで睨み舌なめずりをした。

「ソコノ、オンナヲワタセ」

「こいつ、人間の言葉をしゃべれるのか!？」

ジェイクはゴブリンを指差し肩越しに後ろを見てクインに聞いてみた。

「普通のゴブリンより知能が高いみたいです。気をつけてください！」

「ハヤクシロ！ サモナイト……」

「さもないと何だつてんだ！」

「ウゴオー……ッ！！」

ゴブリンの拳がジェイクの顔面に近づいて来た。ジェイクの顔面に拳が当たる刹那、彼は不敵の笑みを浮かべ、そしてゴブリンの視界から姿を消した。

ゴブリンは辺りを見回したがジェイクの姿は無い！！

「こつちだデカブツ！」

ジェイクの身体は木の上にあつた。そして地上へ切っ先を向け落下し、ゴブリンの身体を突き刺す。モンスターの雄たけびが静かな森に木霊する。

「ウゴオー……ッ」

「ジェイク離れて下さい！！」

「OK」

ジェイクは剣を抜きながら後ろにジャンプした。すると、間を空けずゴブリンの身体に大地に轟く雷光が落ちた。

「グフツ！」

モンスターの身体は地面に大きな音を立て土煙を上げながら倒れ込み、そのまま動かなくなつた。

それを見た少女は安堵感から地面にへたり込んでしまった。

クインは少女に近づき手を差し伸べた。少女はその手に掴まり身体を起こされながらこう言った。

「命を助けていただき、ありがとうございます」

「どういたしまして」

「いいとこばっか持ってきやがってちゃかり最後止め刺してんじゃねえよ」

「まあいいじゃないですか」

ジェイクはまだ少し不満だったが、そのことよりも少女のことが気になった。

「で、何でモンスターに追われてたわけ？」

「そ、それが……」

ジェイクの質問に少女の顔は血の気を失い凍りついた。そしてまた地面にへたり込んでしまった。

「どうしたんですか!？」

少女の目からは涙が止め処なく流れ地面を濡らす。

「お父さんもお母さんも……殺されて……」

「殺された？ 誰にだ？」

「……わからない……でも、みんな殺されて、それで私逃げて……」

「落ち着いて話してみてください」

「……覚えてないの」

ジェイクはクインを後ろに引つ張り少女の聴こえない所で、

「どう思う？」

「たぶん、シヨックのあまり一時的な記憶喪失になってしまっ

たのでは？」

「取り合えず近くの村まで連れてくしかないだろ？」

「でも、僕たち道に迷ってるんですよ」

「だいじよぶだ」

クインはこの言葉を何度聞いて何度だまされたことかと思ったがここはあえて何も言わなかった。

ジェイクは少女に近づきこう言った。

「立てるか？」

少女は小さく頷くと身体をゆっくりと持ち上げた。

「取り合えず村まで行こう、話はそれからだ。村の位置はわかるか？」

「……はい」

「(自然な誘導の仕方だ)」

「じゃあ、村まで一緒に行こう」

トラブルには見舞われたが二人の若者は少女の案内によって、どうにか目的地であるアニスの村まで行けることとなった。

アニスの村への道すがら少女は気を持ち直し元氣を取り戻し三人は軽い自己紹介をした。少女の名前はソフィアというらしい。

いろいろなことを話すうちに時は流れ、三人の前方に村の入り口が見えてきた……。

アニスの村。

「大きな村ですね」

クインがそう言うのは当然だ。都と呼ばれる世界各地にある巨大都市を少しでも外れたとたん、文明のレベルは著しく下がり、大地は荒れ果てた土地となる。そこに存在する村は、自然災害や魔物の襲撃などにより大抵は大きくなることはない。しかし、例外もある。

「はい！ この村は古代文明の研究をしていて、産業が発展したんです」

古代文明とは主に古代人の残した遺跡のことと機械、そして、魔導のことを指す。

「懐かしいなあー、前に来たときは五歳くらいの時だから懐かしそうに辺りを見回すジエイクに対して、クインは少し驚いた表情をして、

「えっ！ 今、何て言いました？」

「『懐かしいなあー、前に来たときは五歳くらいの時だからな』って、言ったんだけど……それが、どうかしたか？」

その言葉に対してクインは、もう、うんざりといった表情で、
「……五歳。『近道しよう』って言ったときはもちろん道を覚えてたから言ったんですよね？」

「いや、しかも実を言うとあの森に入ったのは今回が初めてで前に来たときは街道を馬車に乗ってこの村に来た」

「……はあ」

クインは、もう、どうでもいいといった感じだ。

「あ、あの……」

ジエイクとクインは同時にソフィアに振り向き、クインが尋ね

た。

「何ですか？」

「あ、あの、この村におばさまの家があるんですけど」

「そうだな、まずはそこに行くか」

程なくして三人はソフィアの伯母の家の前にいた。

「あのさあー、ここがソフィアのあばさんの家？」

ジエイクが指を差す先には宿屋を書かれて看板があった。

「はい、おばさまは宿屋の経営をされていて」

「クイン、ちょうど良かったな宿屋探す手間が省けて」

「そうですね」

ソフィアは家のドアを開け中に入って行く、それに続いて二人も家の中へ。

「こんにちはおばさま」

家に入ってきたソフィアの声を聞いて、部屋の奥から出て来たのは中年の女性だ。

「まあ、どうしたんだいソフィアちゃん？」

少女は中年の女性の顔を見た途端、何か弾けたように突然目に涙をいっぱいためて中年女性の胸に抱きついた。

涙をいっぱい浮かべたソフィアはおばさんのことを見上げて言葉を精一杯紡ぎ出した。

「家にモンスターがいきなり入って来て……お父さんも母さんも殺されて……」

「本当かい？ ……あたしには何て言っているのかわからないけど、できるだけのことはしてあげるよ」

「ありがとう、おばさま」

ソフィアは涙を拭き取りすぐに笑顔を作った。

こうでなければ今の世を生き抜くことはできない、強く生きなければこの世界を生き抜いていくことはできないのだ。

中年の女性はソフィアの身体を強く抱きしめ少しの間そのままで時間が過ぎていった。

ややあつて。

「んっ、後ろの人たちは誰だい？」

どうやらやっと、この中年の女性は後ろの二人に気付いたらしい。

それに対して、ソフィアは簡潔にことのあらましを説明をした。

「あ、あの、この人たちは、私が森でゴブリンに襲われていたときに助けてくれたんです」

「そうかい、私からもお礼を言うよ。今日は家に泊まっていくといい、もちろんタダでいいよ」

「サンキューおばさん！」

「ありがとうございます」

クインは最高笑顔を浮かべ中年女性を見つめた。その笑顔を見た中年女性の頬が桃色に染まった。これはクインの必殺技の営業スマイルだ。

「二人は二階の奥の部屋を使っておくれ、ソフィアはいつもの部屋でいいね」

「じゃあ、俺は休むわ」

ジェイクは足早に二階に上がろうとしたのだが、その足が不意に止まった。

「モンスターだ！ モンスターが出たぞー！！」

外から男の大声が家の中まで鳴り響いた。

「……何っ！」

ジェイクの手が直ぐに鞘にかかった。

「はあ、僕らに休息の時間トキはないんですかね」

「ぐずぐず言ってねえで行くぞっ！！」

二人が宿の外に駆け出して行くと、

「あ、待って下さい」

と言ってソフィアが続いて外に飛び出して行った。

二人が宿を出るといきなり足元に男が降って来た。

「何だ？」

そう言いながらジェイクが男の飛んで来た方向に目を向けると

そこには、またゴブリンが！！

「また、ゴブリンかよ」

「オレノ、ナカマヲコロシタ、ヤツラヲダセ！！」

「僕らのことですかね？」

「たぶんな……。来やがれ、オレが相手になってやる」

ジェイクは剣を抜き構えた。ジェイクが戦闘態勢を取ると横から水を差す言葉が聞こえた。

「実は、さっきから変だなあと思っていたんですけど……ここも、結界が張っているらしくって……」

「またかよ」

「でも、さっきよりはマシで初歩魔法ならいくらでも」

「もういいよ、ここも俺に任せろ！」

「……申し訳ない」

地面に切っ先を擦るようにジェイクはゴブリンに走りより剣を振った。そのスピードは驚異的でありゴブリンは避ける暇も無く左腕を切り落とされた。

腕を失ったゴブリンは半狂乱になり、残った腕を振り回してジェイクを殴ろうとするが一発も当たらない。

「なんだそのパンチは親父のパンチに比べりゃー、止まってみえるぜ！」

相手をからかうようにパンチを紙一重で避けている。そして、ゴブリンの一瞬の隙について剣を地面から上に斬り上げた。

「ウゴオーー！」

モンスターの身体は雄叫びとともに二つに割れ地面に倒れた。

「ふう、さすがに今日はもう疲れた、俺は宿に帰って寝るぞ！」

剣を鞘に戻すジェイクの額からは汗が少しだが滲んでいた。

「そうですね、今日はもう宿に帰ってゆっくり休みましょう」

二人が宿に帰ろうとすると、何者かに後ろから呼び止められた。

「待ってくれ」

ジェイクはもの凄い不機嫌な顔をしながら首だけを動かし後ろを振り向くとそこにはハゲ頭の中年男性が立っていた。

「何だよ、おっさん」

近くにいたソフィアが突然口を開いた。

「あつ、村長さん」

「そ、村長！（どう見てもパンチヨって感じだよな）」

ジェイクの顔色が少し変わった。

「そうだ、村長だ」

「で、その村長さんが何の用ですか？」

クインは結構冷静であった。

「君らの強さを見込んで頼みたいことがある」

「頼みごと？ ……高くつくぜ」

「僕たちハンターなんです」

「それなら話が早い、後で家に来てくれないか？」

「わかった、気が向いたら後で行く」

「では、気が向いたら来てくれ」

「宿に帰るぞ」

「そうですね」

宿に戻ろうとする二人をまたソフィアは追いかけて行った。

宿に戻ったジェイクは、

「もう、俺は寝るぞ、絶対起こすなよ！」

と言つて直ぐに二階の部屋に上がって行ってしまった。

「あ、あの、どうしたんですか、ジェイクさん？」

ソフィアは目を丸くして驚いている。

「今日は、ほとんど一人で戦ってましたから、疲れたんですよ」

(僕のせいですかね)

「あ、あの、まだ昼ですよ？」

「あの人、一度寝たら絶対に起きませんから。あつ、それより、この町の古代文明について詳しく聞かせてくれませんか？」

魔導を極めんとするクインは目を輝かせながらソフィアに聞いた。

二人は椅子に腰掛けゆっくり話すことにした。

「えーとまず、あ、あの、この村の近くに遺跡があります。あ、でも、遺跡と言っても、りっぱなお屋敷で、今でもゼメキスという妖魔貴族が住んでいます。この辺りは、その妖魔貴族の支配下にあつて、あ、でも、その貴族とは十数年前、協定を結んで人間に危害を加えることはなくなりました。それで、あ、あの、この村ではその妖魔貴族の研究をしています。妖魔貴族の研究をしている施設は数が少ないので、この村は都から援助を受けることができます」

「それでこの村は都から離れているのにこんなに発展してるんですね」

クインは真剣な眼差しでソフィアの話に聞き入っている。

「どうですか、あ、あの、何かお役に立てましたか？」

「どうもありがとうございます、いろいろと参考になりました」

そういつとクインは席を突然立ち上がった。

「どうしたんですか？」

「僕も疲れたので部屋に戻りますね」

そう言ってクインは笑顔で軽く会釈をして二階に上がって行ってしまった。

クインも疲れているらしく、部屋に戻ったとたんベットに倒れこんだ。

朝が先か夜が先か？
それは夜が先だろう？
では、闇が先か光が先か？
それは闇に決まっている
光は闇の中で輝いているのだから

第二章 薔薇の城

「ふあゝゝゝつよく寝た」

ベットからゆつくりと身体を起こしたジェイクは両拳に力を込め、腕を大きく上げた。そして、横をふと見たときにクインと目が合った。

「おはようございます」

クインは新聞を読みながら朝食をとっている最中だった。

それを見たジェイクは、

「もう朝食とってんの、まあクインが俺より後に起きてきたの見た事ないけど……」

クインの朝は早い、何故かと言うとクインの寝起きはヤバイ。

機嫌は一日の中で一番悪い、人に起こされたときにはもっと悪い。そのため彼は人より早く早く起きることを心がけているらしい。

「朝の時間は一日の中で一番大切な時間ですから」

これは彼の口癖である。

彼はこの時間のことを『営業スマイルの充電時間』と呼んでいる。

普段はあまり見せないが彼は人一倍気性荒く、そして、人一倍熱血漢な所がある。そんな人物なのだ。

「俺も飯にすつか、一昨日の昼から何も食ってないからな」

一昨日二人は前の村を出発してその日の夜ごろにアニス村に到着するはずが、だいぶ予定より遅れてしまい、そのうえ疲労のため寝てしまいこの村についてからも昼と夜の食事を摂っていなかった。

「ここでジエイクに一つ、お知らせがあります」

クインは満面の笑みを浮かべ突然話を切り出してきた。その笑みには一種の神々しささえ感じられる。

この笑みで見つめられたら、人はこの人のためになんでもしてあげようという気になるだろう。しかし、ジエイクは違った……。

「悪い知らせか？」

「そうです」

「……（やつぱり）」

ジエイクの考えは見事的中した。あのクインの笑顔には絶対裏がある、そうジエイクはいつでも疑っている。

「実はお金が余りありません」

「いくらぐらいあんの？」

「一日過ごすのが限界だと思えます」

「で、どーすんの？」

「昨日の村長さんのこと覚えてますか？」

「………忘れた」

この言葉に呆れることもなくクインは淡々と話を続ける。
いつものことなのだ。

「そうですねか……まあ、いいです。たぶん、その村長の家に行けば仕事が貰えると思います」

「……ふーん、じゃあ、行ってみつか」

「それでは朝食をとったら早速行ってみましょう」

朝食を摂り終え二人は村長の家に行くことにした。

一階に下りると直ぐに宿屋のおばさんが愛想の良い笑顔を二人に向けた。

「おはようお二人さん、昨日はよく眠れたかい？」

「はい、おかげさまで」

クインのスマイルが炸裂する。この攻撃によって中年の女性は頬を桜色に染められてしまった。

中年女性の薔薇色の時間は部屋の奥から飛び出して来たソフィアによって現実に戻された。

「あ、あの、おはようございます。あ、あの、もう、旅立ってしまうんですか？」

「いえ、これから村長さんの家に行こうと思います」

クインのスマイルはまだ続いていた。ソフィアは照れ笑いを浮かべてはいるが若い女性には効果は薄れるらしい。

「そ、そうですねか。あの、まだ当分の間、村にいるんですか？」

「そういう事になるな」

「そ、そうですねか。あ、あの、用事が済んだら、いつでもまた

ここに来てください、いつでも歓迎します」

「それでは、用事が済んだら、また来ますね」

クインはスマイルを炸裂させながら、背を向け片手を上げるジエイクとともに宿を後にした……。

「……何だ、この霧！」

二人が外に出ると、そこはあたり一面濃い霧に包まれていた。いつたいこの村に何が起きたと言うのだろうか？

「この霧から、妖気が感じられます」

クインの表情が何時に無く厳しい。曇ったその表情はまさに霧の中にいるようだった。

「どーゆーことだ？」

「……さあ？ でも、村長さんの家に行けば何かわかるかもしれません」

「そうだな」

二人は濃い霧の中村長の家へと足を運んだ。

村長の家はその名に相応しく村の他の家に比べ大きく立派な物で、鉄でできた大きな門が敷地の入り家にあつた。

二人は召し使いに案内され、応接室へと案内され、そこで待つていた村長は大きく手を広げ二人を出迎えた。

「よく来てくれた。君たちを呼んだのは他でもない、もちろん仕事の依頼を頼むためだ」

「で、その仕事の内容ってのは？」

「君たちも見ただろう、外の霧を……」

「はい、見ました」

「あの霧の原因を断ち切つて欲しいのだ。あの霧を操っているのは、この辺りを領地とする、妖魔貴族のゼメキスの仕業だ。

奴はここ数年、人間との協定を結び人間に害を及ぼす事はなかったのだが……昨日村に現れた奴の配下のモンスターのせいで村人に多くの犠牲者が出た、そして霧」

「あ、思い出した！」

ジェイクは何かを思い出したらしく、突然声をあげた。それに驚きクインがすぐさま振り向く。

「どうしたんですか、突然？」

「思い出したぞ、前にも同じことがあった、この村で！」

「なんと！ 君はあの時もこの村にいたのかね？」

「……??? どういうことですか？」

クインは自分ひとりだけ話についていけないと言った感じだ。

「以前にもこれと同じことがあったのだよ。そのときもハンターを雇つて」

「ハンターを雇つて協定を結ばせた、命を助ける代わりに研究させるつてな。以前のこの村にはこれと言つた産業も何もなかったからな」

「そうだ、二人組みのハンターを雇つて協定を結ばせた。あの二人の名前を辺境で知らん者はおらん、半ば伝説とさえなっている。彼らの名前はゼロ……そして」

「……ハーディック 俺の親父だ」

ジェイクが小さく呟いた。小さな呟きであったが村長とクイン

には大きな衝撃を与えた。

「な、なんと!!」

「……!! 今なんて言いました!!」

クインは驚きのあまり声を張り上げた。クインはジェイクからなにも聞かされてなかったらしい。

「そうか、そういえばあのとき小さな子供が……一緒にあの時の子か！ 君ほど適役な者はおらん、ぜひとも依頼を受け
てくれ！」

この時クインはもう空気と化していた。そんなクインを気にも止めず二人の会話は彼を置き去りにしてなおも進んで行く。

「いやだ」

「はっ！ 今なんと!!」

村長はジェイクの返事に思わず聞き返してしまった。

クインは口を開けたまま閉じようとしないうち、こちらはもう放心状態といった感じだ。

「『いやだ』と言ったんだ」

やっと我に返ったクインが言った。

「どうしてですか!？」

今日はジェイクに驚かせればなした。

「親父が言ってた……いい仕事をしたって親父は決まってる言うんだ、大変な仕事をした後は。だから、めんどくさい仕事は疲れるからいやだ」

村長は啞然とした表情を浮かべ、そして少し微笑みを浮かべた。
「君のお父上も最初は君と同じ事を言っていたが……あの時の

事を忘れたのかね、この霧のことを？」

「そうか……：…：…：…：…：…：…：霧の結界の外に出れなくて親父が『この結界を張った奴をぶつ飛ばしてやる』って、わかった……：…：…：…：…：…：しかたない依頼を受けるよ」

「そうか、受けてくれるか！」

クインはここぞとばかりに口を挟む。

「あの、仕事の内容は？」

「以前と同じ、交渉を頼む」

「でも、相手がこちらの要望に従わない場合はどうする？」

「その時は仕方あるまい殺してくれ、村の平和のために」

「わかった」

「報酬は三万ハルクでいいかね？」

「五万だ、しかし、交渉に失敗して相手を殺した場合報酬は一ミルもいらぬ、この村の産業にかかわる事だからな」

ハルクとは金でできている共通硬貨のだが、価値が高いため流通はしていない。ミルとは世界で一番流通している価値の低い鉄製の硬貨のことを言う。

村長は少し考えたあと、ジェイクの申し出を承諾した。

「わかった、その条件を飲もう。それで君たちは相手の妖魔貴族の事をどのくらい知っているのかね」

「詳しく頼む」

「貴族の名はゼメクス・ヴィリジニア伯爵、年は一〇〇〇を優に越える大貴族だ。ゼメクスの住む屋敷は通称『薔薇の城』と呼ばれている。薔薇の城は屋敷全体を薔薇に守られていて、中

に入る事が困難で、そのため屋敷の事を『薔薇の城』と呼ぶようになったのだ。屋敷の中には一〇〇人の寵姫がいる、そして、四騎士がある、後の事はわしにはわからん」

クインはスマイルとともに軽く会釈をした。

「ありがとうございます」

「昼間の内に仕事を片付けたいから、そろそろ行くか？」

部屋を出て行こうとした二人に村長が声を掛けた。

「奴の屋敷は森の中にある、森に入ったら北東の方角に進め」
村長の言葉に二人とも何も反応を示さなかった。二人はそれぞれ考え事をしていたのだ。

「……めんどくさい仕事になりそうだ」

二人の若者は村長の家を後にした。

村長の家を後にした二人は森へと向かった。

村の入り口まで来た二人は村長に言われた通りに北東に向けて森の中を歩き出した。

森の中は木漏れ日が差し込み陰湿な感じはしない、青々と生い茂った草木は清々しさを放ち、木々の間を擦り抜ける風は新緑の匂いを運んで来てくれる。

深い森の中で、薔薇の城に着く間にジェイクはクインの質問攻めにあっていた。

そういえば、この二人は知り合ってから自分のことについて話し合っただけがなかった。この二人の間には、いつの間にか、そういう暗黙のルールが出来ていたらしい。しかし、聞いては

いけない訳ではないらしい。

ジェイク曰くクインの『何で教えてくれなかったんですか』という問いに対して、ジェイクは『いや、聞かれなかったから』とのことだ。それを聞いたクインは、何故かなるほど、と思ってしまった。

森の中を歩き続けて二〇分くらい経っただろうか、二人の前方に薔薇の城と思われる屋敷が見えてきた。

「これが薔薇の城かあ……」

ジェイクの言葉にはため息が混じっている。

「はあ、困りましたねえー」

クインも深くため息をついた。

「……だなあ」

村長の説明通り屋敷は薔薇の花で埋め尽くされ建物自体すら見ることが困難だった。

「どうやって入ります?」

「クインの魔法でどうにか、なんない?」

「実は、さつきから変だなあと思っていたんですけど……」

「もういい、それ以上言うな……」

ジェイクはこのとき本気で『使えねえー、村に置いてくればよかった』と思った。

ジェイクの気持ちを瞬時に読み取ったクインは少し不満そうな顔をした。

「あつ! 今、村に置いてくればよかったですって思ったでしょう。もういいですよ、どーせ僕は魔法が使えなきゃただの人ですか

ら」

「……そんな事、これっぽっちも思っていない」

ジェイクの口元は少し引きつっている。

「やっぱり思ってるんだ、だって今少し間がありましたもん」

痛いところを突かれたジェイクは話をそらそうとする。

「で、どーしようか？」

「話をそらせないでください！」

それでもまだ、ジェイクは話をそらそうとした。

「薔薇を一本、一本、取っていくか？」

「何日かかると思ってるんですか？」

「屋敷ごと焼くか？」

「そんな事したら、屋敷の主が怒って協定どころじゃないです

よ」

「それもそうだ」

クインは、いつの間にかジェイクのペースに巻き込まれていた。

「じゃあ、どーする？」

「どうしますか？」

そのとき、二人の近くで何者かの声が！

「フツ……二人揃って使えんな、そこをどけ俺がやる」

二人が振り向くとそこには赤い服を纏った長身の男が立っていた。

それを見たジェイクの口からこの名前が……。

「あつ……ぜ……ぜ口……！」

「ええっ……！」

クインの顔はそう言ったままで凍り付いてしまった。

偶然？

偶然なんかじゃない

彼らは、ここで出会う運命だったの
奇跡を操ることが出来るとしたら？

それはもう奇跡じゃない

でも、誰もそんな事は思わないよ

だって、誰も気付かないから

自分たちが踊らされてるなんて……

第三章 ハンターゼロ

太陽はもう西の地平線に沈みかけていた。

もうすぐ空は漆黒の闇に包まれる。夜が来る。夜の世界は

妖魔たちの支配する時間となる。

この辺りは妖魔貴族の領地内であり、夜になると強大な力を
持つ妖魔が多く出没する。

夜に外に出るなど死に行くようなものと、人は言う。だから
普通の旅人なら日が沈む前に目的地に着こうと必死になるの
が普通だ。

しかし、彼は違った。日が沈みかけているというのに急ぐ様
子も見せず、森を切り開いて作られた街道をゆつたりとした優
美な足取りでマントの裾をはためかせながら歩いている。この
男は夜が怖くないのか？

この全身を紅いで色で包み込んだ男の背中には長剣がそれも

普通の長剣ではない。その剣は優美な曲線を描き、長さが通常の物に比べ断然長いのだ。こんな物を扱える者はそうはいないだろう。

夜は刻々と迫ってくる。しかし、やはりこの男は急ぐ様子もなく淡々と街道を歩き続けている。

がしかし、この男の足が突然不意に止まった。何があったのだろうか？

男の目線の先には一人の少女が立っていた。

少女の腰には戦闘用万能ベルトが、そこにはハンドガンが挿してある。どうやら、単なる農夫や開拓者の娘ではないらしい。少女の眼光は目の前にいる旅人を鋭い目つきで睨み付けている。

旅人は少女を一瞥すると、何事もなかったように再び歩き出した。しかし、少女は旅人の行く手を塞ぎこう言った。

「金目のものを置いてきな、そしたら命だけは助けてやる」

男は黙ったまま何も答えない。

「聞こえなかったの！」

こう言いながら少女は旅人の顔を睨み付けた。

このとき初めて少女は旅人の顔を見た。なぜなら今まで、この目の前にいる旅人は日の光を背中に受けて逆光となり、顔をよく見ることが出来なかったからだ。

少女の目の前にいる男は顔半分が髪で隠れていて見ることはできないが、もう片顔の血の様に赤い瞳に強い印象を受ける。

この時初めて少女は悟った。この旅人に手を出したのはまず

かったと。この目はただの旅人の眼じゃない。

この時、初めて男は口を開いた。

「もうすぐ、日が暮れる早く帰った方がいい」

この言葉を聞いた少女は一瞬、啞然としたが、

「あなた、自分が置かれてる状況がわかってんの！人の心配より自分の心配したらどう？」

そう言つて少女は腰のハンドガンを旅人の顔に突きつけた。：

…はずだった。男の姿が少女の目の前から消えたのだ。

少女は自分の目を疑った。これは夢ではないかと思うほど驚くべきことだった。

少女が呆然と立ち尽くしていると、少女の耳元で低く重い声が聞こえた。

「……動くな」

この言葉を聞いた少女は心臓の止まる思いだった。

「わかった、もういい、私の負け」

そう言つて手を上げて旅人の方を振り向くと、旅人は遙か向こうを何事もなかったように歩いていった。

「待つて」

少女は旅人を呼び止めようとした。しかし、旅人は止まる様子もなく歩き続けている。

「待つて、お願いだから、止まって！」

旅人は足を止めた、しかし、顔を向けようとはしなかった。

「さつきは悪かったわ、別に本当に追い剥ぎをしようと思つたわけじゃないの、あなたの力を試したかっただけなの」

旅人は足を止め少女の方を振り向いた。すぐに少女が旅人に駆け寄る。

「よかった、止まってくれて……」

「なぜ、あんなマネをした？」

「本当に強いヤツを探してたの、もし見つける事が出来たら、あたしに協力して欲しい事があって」

「俺はハンターだ」

この言葉を聞いた少女は思わず、こう言った。

「あたし、あなたを雇います」

「高いぞ」

「いくらでも払います」

「俺の名はゼロ」

この言葉を聞いた少女の顔は蒼ざめた。「紅い死神」と称されるゼロの名を知らぬ者はこの世界にはいない。今や半ば伝説となつているハンターの一人の名だ。

先ほどの彼の動き、あれから考えてもこのハンターが嘘を言っていないことがわかる。第一このハンターが嘘を言うような人物には到底思えない。

半ば伝説となつたこのハンターを雇うにはそれなりの報酬が必要となる。

通常のハンターを雇う相場は最低でも一日五、〇〇〇ハルク、それに必要経費が付くことがある。しかし、このハンターを雇うにはその相場の一〇倍払わなくてはならないと言われている。彼を雇える者は都においても一握りほどしかないと言っ

の凄腕のハンターなのだ。

先ほどは大見得を切っていくくらでも払うと言ったが、彼女の所有物を全て売り払っても、その金額を払うことはできないだろ。

自分に報酬が払えぬことがわつかった少女は顔を赤らめ言った。「やっぱり、あたしには、あなたを雇う事はできないみたい。あたしにはあなたに払うお金がないわ、本当はあたしのもの全部売ってでも雇いたいと思っただけ、それでも足りないわ」

少女はうつむき、とても悲しそうな表情をした。

「分割払いでもかまわん」

「それでも、払えないわ」

「……今晚あいにく俺は泊まる所がない、この先の村は小さい村なので宿があるとは到底思えん。もし、俺を君の家に泊めてくれたら、その恩は俺に出来ることなら、なんとしてでも返そう」

この言葉は不器用な彼としては上出来と言える。

辺境で語られる彼の噂は冷酷なハンターと言われている。

「えっ、どう言う事!？」

思わず少女は聞き返した。まさか、ゼロがこんな申し出をするなんて夢にも思わなかった。

「言葉のままだ、借りた借りは必ず返す、それだけの事だ」

言葉の意味を全て悟った少女は目に涙を浮かべ、

「……ありがとう」

と今にも消えそうな声で言った。

ゼロはやさしく少女を包み込んだ。二人は夕日にやさしく照らされ輝いていた。

時は流れ辺りは漆黒の闇包まれた。夜が来た。

「夜が来たな……急ぐぞ」

その瞬間には、もう少女はゼロに抱きかかえられていた。

「しつかり、掴まっている」

少女は突然のことに驚いている。

少女は何かを言おうと考えているうちにゼロが、

「ついたぞ」

「えっ、もう！」

あの場所から村までの距離はおよそ二キロ、その間を約一分ほどで着いてしまったのだ。

ゼロは少女を下ろし、こう言った。

「君を落とさぬようゆっくり走った、つもりなのだが……」

この言葉を聞いた少女は魔法ならともかく走ったただなんて、とても信じられないと思ったが、しかし少女の目の前には村の入り口があった。

このとき、少女はゼロのことを本当の人間なのだろうかと思っただ。

この世界には人間と共存している友好的な妖魔も多い。中には人間と区別の付かない妖魔もいて周りの人間に気付かれずに生活を送っている者もいる。ゼロもその中の一人ではないだろうか？ しかし、少女は畏怖の念からゼロにその質問をするこ

とはできなかつた。

村の入り口には大きな門がそびえ立っていた。夜になると門は閉められ一切の外部からの進入を拒む。

門の上には監視役の若者がいて、その若者はこちらに気付いたように声をかけてきた。

「お前たち誰だ！」

若者が目を凝らすと、そこには見覚えのある少女が立っていた。

「アンネ、アンネじゃないか！」

どうやら少女の名前はアンネというらしい。

「早く門を開けなさい」

若者はアンネに言われ門を開けようとしたが思いとどまった。

その訳は。

「お前が本物のアンネという証拠はない、それにそこにいるヤツはなんだ、この村の者ではないだろう」

辺境で生き抜くためには、どんな些細な事にも疑いをかけるのが普通だ。特に夜となれば、それが命取りになりかねない。

「あたしは真正正銘のアンネよ、それにこっちは、ハンターのゼロよ」

ゼロという名を聞いた瞬間、若者は少し戸惑いの表情を浮かべたが、すぐに気を取り直し、

「妖魔の中には、人間に化けたり、幻影を見せることの出来る者がいると聞く、お前がアンネだって証拠を見せる！」

「証拠……？　つて、どんな証拠よ！」

「そんなの知るか、自分で考えろ！」

「何それ、それが幼馴染みに言うセリフ！」

この二人のセリフは側からすると莫迦らしく思えるかもしれない、しかし、二人は真剣だった。

「お前はいつもそうだ」

「何がよ、言ってみなさい！」

「いつも、いつも、逆切れして、なんだよ！　こっちは迷惑してんだよ！！」

「あたしがいつ逆ギレしたって言うの！」

「今してるだろ、自覚症状ないんだもんな」

「なんですって！！」

「そういう態度だと、いつまでも、ここ、開けてやんねえぞ」

二人の戦いはどんどん激しくなっていく。

「もういいわ、こっちにも考えがあるわ」

「なんだ、考えて、言ってみろ」

アンネはハンドガンを腰のホルダーから抜き取り門に向かって構えた。

「門をぶっ壊すだけよ」

そのとき突然門が開いた。開いた門の先にはゼロが立っていた。

「早く入れ、すぐに閉める」

少女は言われるままに村の中へと入った。

がゼロはどうやって門を開けたのだろうか。門が開いた時にはゼロは村の中にいた、要するに内側から開けたことになる

のだが……？

その光景を上から見ていた若者はすぐに上から降りて来て、二人を足止めしようとしたのだが、それは失敗に終わった。なんとアンネが若者に対して、

「あんたねえ、少し疑り深いのよ」

バシツ！　なんとアンネは若者の頬を引つ叩いたのだ。

「いててて、やっぱ本物だったか……」

そう言う若者を尻目にゼ口とアンネはその場を立ち去って行った。

アンネの家は村の奥にある農園だ。ここで育てた食物を売って生計を立てているらしい。

ゼ口はアンネに案内され家の中へと入った。

家の中には人の気配がない、一人暮らしなのか？　しかし、その家には一人以上の人が住んでいる痕跡が家のあちらこちらにあった。

ゼ口は不思議に思いアンネに尋ねた。

「一人暮らしか？」

ゼ口はあえて直接的な質問はしなかった。

「父と母はだいぶ前に亡くなりました、今は妹と二人で暮らしています」

「妹さんはどうした？」

この質問をされたアンネは少し暗い表情になった。

「妹は貴族にさらわれたの……」

「そうか、それで俺の力が必要な訳か」

貴族と言つのは主に妖魔貴族のことを言い、妖魔の中でも強大な力を持った者を貴族と言ふ。

妖魔を支配し、辺境においては人間をも支配する貴族もいる。妖魔の力は歳を老ふことに強くなると言われている。しかし、妖魔の格はそれとは関係なく、他の価値観によつて定められている。

『他を魅了する美貌』、『他を威圧する恐怖』、『他に屈しない誇り』、この三種から、妖魔の格の高位が決まり、妖魔の君、上級妖魔、中級妖魔、低級妖魔、邪妖に区分され格による上下関係は例外は除き絶対である。貴族と呼ばれるのは、妖魔の君、上級妖魔、中級妖魔である。貴族の階級は妖魔の格とは関係ないらしい。

妖魔の君とは数千年以上の時を経て、なおも格を保つ妖魔のことで、大規模な領地を持っている。

領地というのは、力のある妖魔貴族が支配する土地のことであり、それとともに貴族の力の届く範囲でもある。貴族の領地内では、妖魔や人間が支配化となっている。

邪妖とは格を落とした者のことであり、永く生きた妖魔は徐々に格を落とし、ここのたどり着く、別名『見るにあたわぬ者たち』とされている。

妖魔の種類は多種多様で色々な者がいる。吸血一族や人魚、翼のあるものなど、その種類は数えきれない。

妖魔とは異なる魔物と呼ばれるモノがいる。魔物というのは、

そのほとんどが貴族の創りだした生物であるが、中には天然のモノもいる。天然の魔物は力が強く、特殊能力をもっているものが多く、中には知能がすごく高いモノもいて、神と崇められる時には恐れられるモノもいる。ドラゴンなどの伝説的な魔物は東方の国で神と崇められることが多い。

妖魔・魔物ともに人間に恐れられる存在だが、必ずしも、それだけではない。人間に友好的なモノもいることを忘れてほしくない。

コーヒーを出されたゼロであつたがそれには口も付けず、仕事の話始める。

「貴族について、詳しく教えてくれないか？」

「貴族の名前はイドウン男爵、以前この辺りを領地としていました」

「以前？」

「ここ三〇〇年もの間一度も姿を現していませんでした」

「ではなぜ、イドウン男爵だとわかる？」

「妹をさらつた使い魔が言っていました」

「では、確証はないわけだな」

「ええ、まあ」

「そうか……」

何故ゼロは相手がイドウン男爵かどうかにこだわつたのだろうか？

ゼロは険しい表情のまま黙り込んでしまった。

「どうかしたの？」

ゼロは何も答ええない、少しの間、二人を沈黙が包んだ。

そして、ゼロが口を開いた。

「妹さんの名前は？」

「ミネア……」

「君の妹さん以外にさらわれた者はいるのか？」

「私の妹以外に三人さらわれました」

「いつの事だ？」

「全員、三日前の晩に、さらわれたわ」

「そうか……」

また、ゼロは黙り込んでしまった。アンネは何かしゃべろうと必死になった。アンネは間が持たなくなるのが好きではないらしい。

「ゆ、夕食にします？」

「いらん」

即答で返された。アンネが苦渋の末にやっと思いつた言葉だったのに、アンネは気まずい気持ちになってしまった。しかし、ゼロは何とも思っていないだろう。

ゼロが突然、椅子から立ち上がった。

「どうしたの？」

こう聞くのは当然のことと言えよう。

「外が騒がしい」

「あたしには聞こえないけど……」

「出かけてくる」

そう言ってゼロは家の外に飛び出して行ってしまった。

アンネは急いで追いかけてしようとしたが、彼は霧のように姿を忽然と消してしまった。

ゼロが現場に駆けつけると、そこには人だかりができていた。その人だかりの中心には、魔物とそれに応戦している村の若者たちがいた。

ゼロが人だかりの輪の中心へと歩き出すと、人々の目は一心にゼロへと注がれた。

「そこをどけ、後は俺がやる」

とゼロが言うと、その言葉を聞いた若者たちは、まるで催眠術にかかったかのように武器を収め、何も言わずその場を退いた。

魔物の腕には女性が抱きかかえられている。

「気を失ってくれているのが幸いだな」

とゼロは小さく呟いた。

ゼロが剣が煌いた刹那、その瞬間に勝負は決まっていた。まさに一瞬の出来事であった。

そこにいる全ての者が自分の目を疑った。魔物はゼロが剣を抜いた次の瞬間には縦割りに一刀両断されたのだ。そして、女性はゼロの腕の中に……!?

ゼロの剣技を目の当たりにした村人たちは、言葉を失った。まるで夢か幻のようだった。

この沈黙を破ったのは、この場に駆けつけた、男の一言だった。

「大変だ、シムじいさんの孫のドリスちゃんが魔物にさらわれ

た」

そこにアンネが一足遅れ駆けつけてきた。

「どうしたの、この騒ぎは!？」

ゼロがアンネの元へ近づいてきてこう言った。

「ドリスと言う女がさらわれたらしい、ここでモンスターが暴れていたのだが困だったらしいな」

そう言ってゼロは、この場を足早に立ち去って行った。

「ゼロっ、待って!」

アンネはゼロの後を追った……。

夜が明け朝が来た。アンネの家の周りには人だかりができていた。

「アンネ出てきなさい、話がある」

と、人だかりの中の一人が言った。

アンネがそれに応じ家のドアを開けると、そこには人だかりが? どうしたものとアンネは尋ねた。

「どうしたの、この人だかりは?」

白髭を蓄えた威厳のありそうな老人が人ごみを掻き分け、アンネの目の前に現れた。

「アンネ、お前の家にゼロがいるというのは本当なのか?」

「はい、本当です」

その言葉を聞いた人々どよめいた。老人は質問を続ける。

「ゼロを雇ったのか? ……いや、お前にゼロを雇う、お金なんてあるわけがない、どうしたんだ!？」

この質問をされたアンネは困ってしまった。

一日泊めただけで仕事を受けてくれるハンターなんて聞いたことがない、まして相手はゼロだ。そんなことありえることではない、アンネ本人が一番驚いているのだから。

「そ、それは……」

アンネが言葉に詰まると、家の奥からゼロが出て来た。

「雇われたのではない、一晩泊めてもらったその借りを返すだけだ。それがたまたま妖魔退治になった、それだけの事だ……」

この言葉を聞いた人々は、そんな莫迦な話があるものかと人々は口々に言った。

「そんな話信じられん、お主、本物のゼロか？」

「村長、あんたも見ただろう、こいつの剣技をありゃー相当な剣の使い手だ、ゼロでないにしても剣の腕は超一流だよ」

と村人のひとりと言った、それに納得した白髭の老人「村長は、

「ゼロ、わしらの依頼を受けてくれんか？」

「断る」

ゼロは冷やかな態度で言った。

「何故じゃ、わしらに依頼料が払えんと思つて莫迦にしておるのか？」

「これから俺はアンネの妹を助けに行く、そうすれば、必然的に他の村人を助ける事になるだろう」

その言葉を聞いた村人達は驚きの表情を浮かべた。

ハンターというのは依頼された仕事以外のことは一切やらな

いのが普通だ。だからハンターというのは冷酷なイメージをもたれることが多い。ましてゼロの強さは半端ではない、そのため噂に尾びれがいくつも付く。

「もう、用はないだろう」

そう言っただけでゼロは、アンネを家の中へ押し込み、玄関のドアを閉めた。

家の中に入るとアンネがゼロのことを見ながら、ニコニコとした表情を浮かべ見つめていた。

ゼロが、

「どうした？」

と、聞くと、

「ゼロ、あなた、噂では色々悪い噂が多いけど、本当は良い人なのね」

「結果的に他の村人も助ける事になる、それだけのことだ」と言っただけで、それっきり黙ってしまった。

次にゼロが口を開いたのは村を出る時であった。

「君の妹さんは必ず助け出す、心配せずに待っている」

そう言っただけで、ゼロは村を後にして行った。

……時として偽りは

人々を恐怖させるのね

嘘……それが始まり

どんな者にも役割があるってこと？

そう、だから出会えたのさ

偶然ではない必然

第四章 過去の亡霊

アンネから馬を借りたゼロは手綱を確りと握り締め、朝もやの中を馬を走らせて行つた。

村から北東に馬を跳ばして約二時間、小高い丘の上にイドウン男爵の屋敷はあつた。

イドウン男爵の屋敷の前には門番と思われる貴族の創りだしたアンドロイド兵が壁のようにそびえ立っていた。

ゼロは門番に向かつてこう言つた。

「門を開ける」

と、しかし、門番が応じるはずもなく、いきなりゼロに向かつて襲い掛かつてきた！

ゼロはそれを交わすと、相手の背後に回り剣を振り下ろした。

「ギゴオオオー」

アンドロイド兵は不気味な音を上げ、そのまま地にひれ伏し動かなくなつた。

ゼロが剣を鞘に収めると何処からともなく、声が聞こえてき

た。

「いやー、おみごと、あの門番を倒すとは……しかし、門番は飾りにすぎん」

この声はスピーカーから発せられているものだろう。

この屋敷のいたる所に監視カメラ、レーザー銃など色々なものが備え付けてある。

「馬鹿に嚴重だな……」

「ハンターごときがこの屋敷に入れるものか、そこを一步でも動いてみる、レーザー銃で丸焦げだ」

「やってみなくてはわからん」

そう言うとゼロは自分を映し出している監視カメラを叩き斬った！

別のカメラに切り替わった時には、そこにはゼロの姿はもうなかった。

「あいつ、どこに行きやがった」

屋敷の警報がけたたましく鳴り響いた。ゼロは瞬時のうちに屋敷の中に忍び込んだのだ。しかし、監視カメラでいくら探してもゼロの姿は見つけることはできなかった。ゼロはいつたどこに行ってしまったのだろうか？

ゼロは屋敷の地下洞窟の中にいた。どうやら、ここまでは監視の手が行き届いていないようだ。

「やはり、この洞窟の中までは知らんとみえる」
と、ゼロは呟いた。

どういうことだろうか？ ゼロは以前にもここに来たことが

あるのだろうか？

ゼロは洞窟の中を歩き続けた。すると、ゼロの目の前に全長三〇メートルを優に超える地竜が、ゼロの行く手を待ち受けていた。

地竜というのは太古の昔から存在する魔物の一種で、竜族というのは皆知能が高く中には神として崇められ、そして、恐れられるモノもいる。

地竜が人の気配を感じ、身を起こし気配のほうへと目を向けた。

「……ゼロか」

どうやら、この地竜は人間の言葉が話せるらし。しかし、なぜゼロの名を？

地竜はゼロに問う。

「ゼロよ、何をしに来た？」

「少し立ち寄っただけだ」

「そうか……以前ここに来た時と同じ事を言っていたな……あれ以来、人間の言葉をしゃべるのは久しぶりだ……はて、以前お前がここに来たのは、いつの事だったか……？」

「三〇〇年ほど前だ」

三〇〇年!? いったい、どういうことなのか、今、確かにゼロの口から放たれた言葉は三〇〇年と聞こえた。

「そうか……三〇〇年しか、経っていないか、お前も以前とちつとも変わらん、さすがは、半分だけ妖魔のことはある」

なんとということであろうか、ゼロは人間ではなかったのだ。確

かにそうだ、人間離れした能力の数々がそれを物語っている。しかし『半分だけ』とはどういうことなのか？

「ゼロよ、どうだ、またあのときのように一戦交えてみぬか？」

それに対してゼロは、

「断る、今日は、お前と戦っている暇などない」

それを聞いた地竜は少し肩をすくめ元気がない声で、

「そうか……確かに、お前とやり合っても、わしに勝ち目はないが……」

「質問がある」

ゼロが話を突然切り出した。

「なんだ、言ってみる」

「イドウン男爵はどうした？」

「あ奴か……あ奴なら、お前との戦いに敗れた直後に、この屋敷を後にした、今は何処で何をしているのか……？」

「そうか、やはりな……」

イドウン男爵は、この屋敷には、もういない？ では、今、この屋敷にいるのは誰なのか？ 村の人々をさらったのは誰の仕事なのか？ 謎は深まるばかりだ。しかし、ゼロは最初から全てを知っていたかのように表情一つ変えない。

「では、この屋敷の今の主は誰だ？」

「わからん、わしは、この洞窟でひっそり暮らしているだけの忘れられた存在だ」

「たまには外に出たらどうだ？」

「わしの時代はもう終わった、出る幕もなからう」

「そうか、また会おう」

「もう行ってしまうのか？」

「この仕事は全て終わったら、また、ここに来る。今度は本気で一戦交えよう」

「バレておったか」

ゼロは地竜のもとを後にした。

洞窟を抜けると、そこは屋敷の主の部屋につながっていた。

この洞窟は、万が一に備えて、敵が攻めてきた時に外への脱出口として造られたものだった。ゼロは以前この屋敷に潜入したとき、あの洞窟を見つけたのだ。

主の部屋には生物の気配は一つもなかった。ゼロが他の部屋に移動しようと部屋を出ると、そこはすでにアンドロイド兵によつて取り囲まれていた。

「探したぞハンター、まさかハンターごときがこの屋敷に侵入する事ができるとは」

「隠し通路を知らんのか、ここの主は？」

「隠し通路……？　そうか、そんなものがあつたのか、後で塞がなくては、さてハンターよ、もう逃げ場はない、どうする？」

「こうするまでだ」

ゼロは剣を抜き、アンドロイド兵達に斬りかかった。しかし、アンドロイド兵の数は一向に減らない、むしろ増えているくら

いだ。

ゼロは走った、アンドロイド兵を切り倒しながら、屋敷中を走り回った。しかし、ゼロはいつの間にか廊下の隅へと追いやられていた。逃げ場はもうない、どうするゼロ！

その時突然、ゼロの手から剣が滑り落ちた。そして　ゼロの全身から力が抜け、ゼロはそのまま床に倒れこんでしまった。ゼロの身にいったい何が起きたのか！？

ゼロが目を覚ました時には、辺りはアンドロイド兵の残骸がガレキの山を作り上げていた。いったい、ゼロが気を失っている間に何が起きたというのか？

ゼロは身体をゆっくりと起き上げ、こう呟いた。

「また、発病したか……」

また？　以前にも、これと同じようなことがあったのか？　ゼロは自分が気を失っている間に起こった出来事を全て把握しているように思えた。

辺りは静けさに満ちていていた。どうやらアンドロイド兵は全て破壊されたようだ。

「やはり、残るは監視部屋か……」

先ほどから、敵はゼロの行動を監視カメラによって監視しつつけている。そんなことができるのは主の部屋か監視部屋のみ。主の部屋には誰もいなかった……。

となると残るは監視部屋のみ。しかし、これは三〇〇年前の話だが……。

ゼロは監視部屋へと向かった。

ゼロの感は的中した、敵は監視部屋にいた。

「ハンターよ、よく来た」

部屋の中は暗闇に包まれ、声は聞こえるが姿は見えない。

「村人を返してもらおう」

「それは出来ぬ相談だな」

「しかたあるまい」

と言つてゼロは剣が抜くと、暗闇の中の声が、

「ま、待て、私に向かつて剣を抜くとはいいい度胸だ、私をイドウン男爵と知つての事か？」

これを聞いたゼロは苦笑を浮かべた。

「……フツ、この道化が、イドウン男爵は三〇〇年前に屋敷を出たと聞くが？」

そう言つてゼロは、闇に向かつて剣を突き刺した。

「……グフツ……やはりバれていたか……アンドロイド兵がやられた時に逃げたおけばよかった……グフツ」

呆気ない幕切れであった。

ゼロはこの屋敷の偽者の主を倒し、囚われた人々のもとへと向かった。

村人たちは、屋敷の地下牢に閉じ込められていた。そこには、屋敷の近隣にある村から集められた大勢の人たちがいた。

その人々の話を聞き、まとめると、この人たちは妖魔による人間売買のために、ここに連れて来られたことがわかった。

妖魔による人間売買とは、労働力や吸血貴族の食事などに用

いられる人間を確保することを目的としている。

先ほどの偽主はここを拠点として人間売買をしていた下級妖魔だったらしい。

その下級妖魔は自分をこの屋敷の主、イドウン男爵に偽って人間達に恐怖を与え仕事を円滑に進めていたらしい。

たしかにイドウン男爵の名を語ることは、効果絶大だったと言えよう。イドウン男爵の名を聞いたものは、その名を聞いただけで恐怖すると言われる貴族である。イドウン男爵に仕返しをしようなんて者は、まず、いないだろう。そこに下級妖魔は目をつけたのだ。

下級妖魔はチカラこそ、余りないものの、その分、頭の切れる奴が多いと言われている。このようなケースは、よくある事と言えよう。

ゼロはアンネの妹を探したが何処にもいない。アンネの妹は何処に行ってしまったのか？

アンネの妹のことを詳しく聞いてみると、なんと、アンネの妹だけは、他の者よりも早く売りに出され貴族に買われていったらしい。

アンネの妹を買っていった貴族の名は、ゼメクスという貴族の使いの者らしい。

ゼロはゼメクスと言う名を聞いた瞬間なんとも言えぬ表情を浮かべ、そして、空を見上げこう呟いた。

「ゼメクス・ヴィリジニア伯爵……おもしろい」

ゼロが村に戻ったのは翌日のこと夕方だった。

他の村の人たちを送り届け、最後にアンネの待つこの村へと戻って来たのだ。

それを見た門番の若者はそのことを村中駆け回りの人に伝えるとき、人々は村の入り口に集まって来た。しかし、ゼロは、そんな人々のことなど目もくれず、真つ先にアンネの元へと足を向かわせた。

アンネもゼロの帰還を聞き、家を飛び出しゼロの元へ向かった。そして、村の入り口に向かう途中でゼロと出合った。

「村の人たちが帰ってきたって、本当？」

「ああ……」

「ねえ、私の妹は？」

アンネはうれしそうにゼロに聞く。しかし、ゼロは、

「君の妹さんは……」

ゼロは言葉に詰まった。

それを察したアンネは、

「……そう…ミネアは死んでしまっていたのね…いろいろ、ありがとう」

「君の妹さんは死んだと決まった訳ではない、ただあの屋敷から、別の場所に移されたらしい」

「えっ……そうなの、よかった、まだ死んだわけじゃないのね」

この言葉にはうれしさが込められていた。

「ああ……これから俺は君の妹さんを探しに行く。まだ、君と

の約束は果たしていないからな」

ゼロがそう言うと、アンネの目には涙が溢れていた。

そして、アンネはゼロに抱きつき、こう言った。

「やっぱりあなた、良い人ね」

そう言い終えるとアンネはゼロの身体を離れ、涙を拭った。

「後の涙は、妹が帰って来た時のために、残しておくわ」

「そうだな」

そう言っただけでゼロは、アンネのもとを後にしようとした。

「待つて、もう行っちゃうの？」

「ああ、場所は知っている、一刻も早いほうがいいだろう」

そう言っただけでゼロの姿は夕日に溶けていった。

村を出て三日、ゼロはアニムの村の近くにいた。

ゼロは、この村の近くにある屋敷にアンネの妹がいることを知っていたのだ。

ゼロの足が不意に止まった。ゼロの目の前には大量の霧が発生していて、一寸先も見ることができない。

その霧は何かに覆われているように、ある一定の範囲から外に広がらない。これは、どういうことなのであるのか？

「霧の結界か……以前も、これと同じ事があったな……」

以前にもあった？ それはどういうことなのか？

「この結界は侵入者を拒むためのものではなく、内にいる者を閉じ込めるためのもの……」

ゼロはこの結界についてよく知っているらしい。

「以前は内側からでびくともしなかったが、外からの攻撃には弱いはず」

そう言っただけで霧は剣を抜き、霧に向かって斬り掛かった。

すると、形をもたぬはずの霧が真つ二つに別れ、向こう側の景色を見ることが出来た。

ゼロは霧の裂け目から中に入った。ゼロが中に入ると霧はすぐに元通りに戻ってしまった。

「これでもう、後戻りはできんな……」

ゼロの言う通り、もう、外の世界に出ることはできない。この霧の元凶を断つまでは……。

ゼロはとりあえずこの村の村長に会いに行くことにした。ゼロは村長に会って何をしようというのか、そこにこの霧の手がかりがあるというのか？

村長の家の着くと村長自らがゼロを厚く持て成した。

「ゼロよ、久しぶりじゃな、また、お主に会う事ができるとは……依然と同じ状況で」

この村長も以前という言葉を使った。以前この村で何があったというのか？

「やはり、この霧は奴の仕業か？」

ゼロはこの元凶の正体を知っているのか？

「そうじゃ、おそらくゼメキスの仕業じゃろう」

「そうか、それだけ聞ければ、もう、ここには用はない」

そう言って部屋を出て行こうとしたゼロを村長が呼び止めた。

「待ってくれ、依頼を受けてくれんか？」

「断る」

「そうか、なら仕方あるまい」

「今回はやけにあっさりしてるな」

「今回はもう別のハンターに依頼をしてある。聞いて驚くな、依頼を受けたのはハーディックの息子のジェイクだ」

「何っ！！」

ゼロをこれほどまでに驚かせることはそう滅多にない。

「フツ……運命の悪戯か……いや、それにしても今回は偶然が多すぎる」

ゼロは村長に何も言わずこの場を後にした。

妖魔貴族ゼメキス・ヴィリジニア伯爵、歳は一〇〇〇を優に越える大貴族だ。

そのチカラは絶大で、片手で竜巻を起こし、その息は鋼鉄をも溶かすと言われている。超一級の上級妖魔であり、その実力は妖魔の君と同等であるとも噂されている。

しかし、彼は数年前に人間との間に協定を結び、それ以降人間に害を及ぼすことはなかった。その協定を結んだ伝説のハンターこそがゼロ、そして、当時の相棒ハーディックであった。

この二人のハンターの名を知らぬ者は、この世界にいないと言われるほどの超一流のハンターである。

ゼメキス伯爵の屋敷は森の奥にある。その屋敷は薔薇の花に覆われ、外部からの一切の進入を拒んでいることから通称『薔薇の城』と呼ばれている。

深き森を抜けゼロが屋敷の近くに来ると、なにやら二人の若者が薔薇の城の前で何かをもめていた。

「実は、さつきから変だなあと思っていたんですけど……」

と、髪の毛の長いほうが言うと、それに対して金髪のほうが、

「もういい、それ以上言うな……」

「あっ！ 今、村に置いてくればよかつたって思ったでしょう、もう、いいですよ、どーせ僕は、魔法が使えなきゃただの人ですから」

「……そんなこと、これっぽっちも思っていない」

「やっぱり、思ってるんだ、だって今、少し間がありましたもん」

この二人の話はこの後も続き、ようするにこの二人はこの屋敷に入る方法を模索しているということらしい。

ゼロには片方の若者に見覚えがあった。金髪の若者の方だ。

そう、その金髪の若者こそが、ハーディックの息子のジェイクだ。

以前に比べ大きくはなつたがジェイクの面影、そして、父親であるハーディックの面影がある。

以前は三人で旅をしていたこともある。その時アニスの村に立ち寄り事件に巻き込まれた。そう、今回と同じような霧が村を覆っていたのだ。

ゼロは二人の若者を少しの間見守っていたが、二人の若者は館に入る方法を断たれて成す術もないといった感じだ。それを

見たゼロは仕方なく、姿を現すことにした。

「フツ……二人揃って使えんな、そこをどけ、俺がやる」

「あつ……ぜ……ゼロ……！」

「ええっ……！」

今ここに運命の歯車が、二つ噛み合う事となった。

ゼロ、そして、二人の若者の行く末には何が待ち受けているの
だろうか？

ゼメキス伯爵は、なぜ今になって協定を破るようなことをしたのか？

全ての歯車が揃った時、その時初めて時間^{トキ}は刻みだす……。

偶然にも程があるだろう？

まだ運命の糸が残っていたなんて

個体は全体であり

全体は個体である

世の中はそうやって成り立っているのさ

第五章 ゼメキス伯爵

紅い服の男を目にしてしまったジェイクは大きく目を見開かされた。

「あつ……ぜ……ゼロ……！」

「ええっ……！」

クインの顔はそう言ったままで凍り付いてしまい、ただ一心に紅い服の男に目を奪われ放すことができなくなっていた。

ゼロはマントの裾をきびし二人に歩み寄りジェイクの顔を見ながら子を見る父親のような眼差しで見た。

「ひさしぶりだな、ジェイク」

「なんで、ここにゼロがいるんだよ」

「ゼメキスに用がある、ただそれだけだ」

完結に述べるゼロに少しムツとしてしまったジェイクはそれ以降口を出そうとはしなかった。

そんな不機嫌そうなジェイクの顔を見てすぐさまクインはスマイルを炸裂させる。

「はじめましてゼロさん。クインと申します。ゼロさんもこの

霧の事でここにいらしゃったんですか？」

「それとは別件なのだが」

言葉の途中でゼロの表情は険しいものに変わった。

「……フツ、この霧をどうにかしない事には俺も外に出れん」

「じゃあ、ゼロさんも一緒に戦ってくれるんですね」

「向かってくる敵は倒す。だが、自分の身は自分で守れ」

冷たく言い放ったゼロに対して、ジェイクは喰って掛かる。

「そんな事言われなくたってわかってるよ！」

「口は達者になつたようだが、戦闘の技量は上がってないな」

「なんだよ、見てもないくせに！」

今にも飛び掛かりそうなジェイクの身体をクインは後ろから押さえなだめた。

「ジェイク、落ち着いてください」

押さえつけられているジェイクは餓える獣のようであったが、そんな彼を冷たい眼差しで見るゼロは猛獣より勝る恐ろしさを内に秘めていた。

「こんな薔薇に苦戦を強いられているようでは、技量はたかが知れている」

長剣を鞘から抜き出しながら、

「……フツ、まあ見ている」

そう言うのと剣を抜き目にも留まらぬ速さで、あつという間に薔薇を切り裂いてしまった。薔薇の花びらが宙を舞い、そして紅いじゅうたんを作り上げた。

薔薇のじゅうたんはゼロのためにあるかのように優美な足取

りで踏みしめられる。

「行くぞ」

あまりの出来事に言葉を失っていた時間はゼロが剣を鞘に戻す音で再び時間を刻み始めた。

「すごい！　すご過ぎます！！」

クインの腕から放されたジェイクはうつむき呟いた。

「わかってる、そんな事……」

「どうしたんですか？」

「ゼロは俺の知ってる中で一番のハンターだ。ゼロの壁すら、俺には見えない……」

ジェイクにとつてゼロとは憧れであり、目標である。しかし、彼にはゼロという壁すら見る事ができない。そんな自分が情けなくて、どうしようもなく、だからゼロに反発を抱き、対抗心を燃やし、何かと突っかかることが多くなってしまうのだ。

三人は屋敷の中に入ろうと門の前まで来た。

そのときだった、門が内側から開けられ中から何者かが三人の目の前に姿を現した。

白い甲冑に身を包んだ女性。この女性こそゼメクス伯爵に仕える四騎士のひとり美氷の白騎士ルシアンであった。

「おひさしぶりです、ゼロさん」

白騎士の神々しいまでのアルカイクスマイルがゼロに向けられるが、彼無言で白騎士を見つめすぐに視線を外した。

ゼロは目の前に現れた白騎士に関心を持っていないようだが、ジェイクは違った。

「あんだ誰だよ」

「これは失礼、わたくしは白騎士と申します者で、この敷の主、ゼメクス様に仕える騎士でございます」

クインは白騎士の言葉を聞いてすぐにジェイクへと視線を移動させた。

「この人が村長さんが言っていた四騎士でしょうか？」

クインの言葉を聞いた白騎士は苦笑を浮かべた。

「四騎士ですか……今はもう二人になってしまいました」

「どーゆー事だよ」

「そこにいるゼロさんとハーディックさんに殺され、天に召されてしまいました。そういえば、今日はハーディックさんは一緒にではないのですか？」

「親父は、今日はいねーよ」

「親父……？」

白騎士は首を傾げジェイクを見つめる。

「ハーディックさんのご子息の方ですか？」

「黒騎士はどうした？」

ゼロが突然口をはさんできた。彼は周りの会話などお構いなしといった感じだ。

「黒騎士はある所で敵と交戦しております」

そして、白騎士も戦いを始めるべく剣を抜いた。

「ゼロさん、あなた方を屋敷の中へと入れる訳にはいきません。

ここはひとつ、お引き取り願えませんか？」

「断る」

「いやに決まってるんだろ」

「ここまで来たら、前に進むまでです」

自信に満ちたクインの一言を聞いてジェイクは細い目をしてクインを見た。

「つて、お前魔法使えないんだろ」

「うっ……」

痛いところを突かれたクインは痛恨の一撃を受けた！

白騎士は蜃気楼のように揺らめき動き、剣を構え目の前の敵たちを青眼の目つきで見つめて口端を少し上げた。

「仕方ありません……不本意ですが実力行使をさせていただきます」

ゼロが剣を抜き前に出た。

「ジェイク、クインさがっている」

「俺だつて戦える！」

「さがっている！」

ゼロの言葉は低く、冷たく、刃のように胸を貫いた。まるで時が止まったかのように辺りは静まり返った。

紅い瞳で見つめられたジェイクは何も言わず目を伏せ下を向いた。そして小さく呟いた。

「……わかった」

ゼロの持つ剣の切っ先が日の光を浴び煌いた。

「一対一で戦うのは相手への敬意だ」

「ありがとうございます」

二人は地面を蹴り風を切った。剣の交わる音が辺りに響いたか

と思うと互いに飛び退き再び剣を振るう。

しかし、ゼロが突然切っ先を地面に下ろした。そして、白騎士の振るう剣の刃先がゼロの顔ギリギリ、三センチメートルほどのところで止められた。なぜゼロは剣を下ろしたのか？そして、白騎士はゼロを仕留めることができたのにもかかわらずなぜ剣を止めたのか？

「どうしたのですかゼロさん、戦いの最中ですよ？」

「それはこっちのセリフだ」

二人は互いに剣を鞘に戻した。戦いは思わぬ形で終わってしまった。

「殺気も何も感じられなかった」

「貴方のその目は何もかも見通してしまうのですね。ゼメキス様がお待ちです、お急ぎください」

二人の会話に首を傾げるクイン。

「どういう事ですか？」

「行けば解ります」

白騎士はそれ以上何も言おうとしなかった。

無言のままゼロは屋敷の中へと入って行ってしまった。

ジェイクとクインはゼロの後を追ったが、何かふに落ちない気持ちだった。状況がさっぱり飲み込めない。

クインが屋敷に入る前にふと後ろを振り向くと、白騎士がにこやかな顔をしてこちらに向かって手を振っていた。この白騎士の行為がクインの頭を疑問と不安でいっぱいにした。

ジェイクとクインが屋敷の中に入ると、ゼロは遙か遠くを前

を歩いていた。二人はゼロの後を急いで追った。

ゼロは一度も足を止めることなく屋敷の中のある場所に向かつて歩いている。彼はこの屋敷の内部を熟知しているのだ。

そんなゼロを二人の若者はただ付いて行くだけだった。

屋敷の内部は絢爛豪華である華やかな中世ヨーロッパ様式になっている。妖魔の世界ではごく一般的な趣味と言える。

妖魔の中には機械に囲まれた生活をしている者もいると思えば、暗い洞窟の中でひっそりと身を潜めて暮らしている者もいる。しかし、やはり妖魔の多くの住まいとして用いられるのは中世ヨーロッパ様式の絢爛豪華な屋敷である、だがそんな屋敷に住んでいるのは妖魔貴族に限られている。

屋敷の中を歩き続けて数分経ったが、今まで屋敷の住人とただひとりたりとも出会うことはなかった。

三人が屋敷の中に入ったことは、白騎士が三人を出迎えたことからすでに知っているものと思われる。三人の行く手を阻む者が現れないのは不思議だ。そう言えば白騎士の態度も変であった、『ゼメキス様がお待ちです、お急ぎください』、あの言葉の意味は？

この屋敷に入って初めてゼロの足が止まった。

「この先にゼメキスがいる」

この言葉を聞くまでもなかった。扉の向こう側からは凄まじいまでの鬼気が発せられている。扉の前に立っているだけ普通の人間は足がすくみ立っていることもできないだろう。

クイン額からは大粒の汗が流れ落ちた。身体の正直な反応は

不安を隠すことはできなかつた。

「もの凄い妖気ですね、まるで目の前にいるような……」

焦りの色を浮かべるクインを横目で見たジェイクは、

「帰った方がいいんじゃないかな、クインちゃん？」

と冗談っぽく言い、それに続いてゼロまでが、

「自分の身を自分で守れぬようであれば帰れ」

と言われてしまった。

クインは右手首にはめた瑠璃色のブレスレットを握り絞め扉の先へと視線を向けた。

「大丈夫です。自分の身は自分で守れます……いざとなれば奥の手もありますから」

不敵な笑みを浮かべたクイン。彼の言う奥の手とはいったい何なのか？

しなやかでいてそれでいて力強い手が装飾の美しい扉へと押し当てられた。

「行くぞ」

閉ざされていた扉がゆっくりと開かれた。刹那、中から背筋を凍らす鬼気が三人を包み込んだ。

部屋の奥には黒いマントで身体を包み込んだ銀髪紅眼の男が立っていた。この男こそが人々から大貴族として恐れられるゼメクス・ヴィリジニア伯爵である。

「御機嫌ようゼロ」

ゼメクス伯爵の挨拶を無視して無言のままゼロは相手に近づき、その後を二人の若者は付いて行く。

ゼメキスの身体は塵気楼のように揺らめきながら、消えては現れを繰り返しゼロの目の前まで移動した。

「今日はハーディックは一緒ではないのかい？」

「つい最近、この屋敷に人間の娘が連れてこられた筈だが？」

相手の言葉を無視して話をするゼロと同じようにゼメキスも相手の答えなどどうでもいいといった感じで話を続ける。

「ハーディックの気配がしたと思ったのだが……？」

ゼメキス伯爵の紅い瞳がジェイクを見据えた。

「その君からハーディックと同じ匂いがする。もしかしてハーディックの親類かい？」

この言葉にクインはジェイクの顔を見つめてこう言い放った。

「ジェイク昨日お風呂入らないで寝たからあんなこと言われるんですよ」

「おまえなあ、ケンカ売ってんのか？」

「さっきの仕返しです」

クインは扉の前でジェイクにからかわれたことを根に持っていた。クインは恨みなどを絶対に忘れず、いつか仕返しをしようと心がけている、そんな爽やか笑顔青年であった。

ここにいてる全ての者を無視してゼロの話は続いていた。

「娘の名前はミネア」

この男も周りの会話を無視していた。

「俺の名前はジェイク、ハーディックは俺の親父だ」

どうやらここにいてる者たちは全員人の話を聞かないタイプらしい。

「私は忙しい、用件があるのならば早く言いたまえ」

ゼロはすでに用件を言っている。しかし、ゼメキス伯爵は聞いていなかったらしい。

クインは改めて自分たちがここに来た理由を話した。

「貴方は協定を破りました。今日はそのことでお伺いした次第です」

「ああ、あの娘か。あの娘ならばもうここにはいない」

貴族というのは変わり者が多いというが、この男の自己中ぶりは貴族にしても酷い。この酷さは貴族以前の問題だ。

「娘はどこにいる」

「家に返した。あの娘がここに来たのは偶然が重なった手違いなのでな」

「そうか……偶然か……」

偶然　この言葉がゼロの頭に引っかった。

全ては偶然にしては出来過ぎている。何か因縁めいたものをゼロははじめから感じていた。

伯爵は漆黒のマントをきびし反し訪問者たちに背を向けた。

「協定の事は人間たちには悪い事をしたと思っっている」

「それでは早く霧をどうにかして頂けませんか？」

「それはできない」

「どーゆーことだよ!？」

ゼメキス伯爵はマントの裾を手で持ち大きくはためかせながら振り向いた。

「それはできない」

「私の寵姫が一人さらわれてしまった……こちらにも色々事情があつてな……」

「そんなこつた俺たちの知つたこつちやねえよ」

「そうとも言えないと思うが」

ゼメキス伯爵は口の端を吊り上げ前にいる者たちを紅き瞳で見据えた。

「私の屋敷からさらわれた姫の名は薔薇姫、彼女は厄介な能力の持ち主でな。私は生憎この屋敷を離れることができない。君たちが薔薇姫を連れ戻してくれば話は丸く収まるのだが？」

「詳しい話をお聞かせ頂けませんか？」

「めんどくさいが仕方ない。霧の結界を張つたのは人間たちの為でもある」

霧の結界を張つたのが人間たちの為？ 果たしてゼメキス伯爵は敵か味方か、話は混迷を深めてきた。

「私の領域内に私に牙を向ける者が現れてな、前々から気になつていて安全の為に屋敷の周りの森に結界を張つておいたのだが……敵の力は私の想像以上であつた。そこで仕方なく霧の結界を私の全領土に張つたわけだが……」

「だからそれのどこが人間のためなんだよ」

「村に現れたモンスターの事は知っているな」

ジェイクとクインはこの言葉に不意打ちを喰らつたようにきよとんとした表情を浮かべてしまった。

「どういうことですか？」

「あれは私に牙を向ける者の仕業だ。私が霧の結界を張る事に

より奴らの力を抑える事できる、下等なモンスターが村を襲うことはもうないだろう。だが私の狙いはそれよりも敵を私から逃げられぬよう私の領土に閉じ込めることだ。私に牙を向ける者を生かしておけぬ」

長い間沈黙していたゼロが口を開いた。この話に興味でもそそられたのであろうか。

「敵とは誰の事だ？」

「私も詳しくも知らんが、わかることは奴らは薔薇姫の力を狙っていることと、厄介者である私の命を狙っているということ」と

「薔薇姫は何故さらわれた？」

「それは言えん。まあとにかく私を倒しても霧は消えるが問題の根本的な解決にはならん。君たちの選択肢は薔薇姫を連れ戻すか、この私、ゼメクス・ヴィリジニアを倒すかだ」

ゼメクスの問いに対してゼロは剣を抜き答えを出した。

「そうか、それが君の答えか……ならば仕方あるまい、掛かって来たまえ」

静かであるがその声は背筋の凍るような威圧感が含まれていた。二人が戦いを始めようとしたその瞬間、この場にいる全員が頭に痛みを感じ吐き気を催し床に倒れこんでしまった。いったい何が起こったというのか？

過去の記憶を辿れば未来が見える

この話の発端から

この話の結末まで……

偶然なんて言葉は無かった

第六章 過去の惨劇

気が付くと私は暗闇の中にいた。

なぜ私はここにいるんだろう？

覚えてない……私……？ 私って誰？

どうやら記憶喪失ってやつみたい。

なんだかさつきから私ってば冷静だなあ、こういう状況の時

ってみんなこうなのかな？

まあいいや、そんなことより今は私の置かれている状況を把握するのが大切だよな。

ゴン！！ 痛い……動こうとしたら頭打っちゃった。どうやら箱の中で横になってるみたい。なんで私はこんな箱の中にいるんだろう。この箱は人が一人入れる位の大きさ、しかも私にピッタリ合う大きさに作られているような……まさかね、まさか枢なんてことはないよね。私死んだのかな？

「誰かいませんか？」

人のいる気配もないし、小さな箱の中で大声でしたら耳が痛くなっちゃった。

パンツ！！箱はびくともしない。はあ……仕方ないから寝
ちやお。

寝ていたので時間がどの位経ったのかわからないけど、
私は目覚めた。

まぶたに強い光を感じた。眩しい……眩しいけど仕方なく目
を開ける事にした。

私の目の前には誰かが立っていた。……綺麗な人だ、純粹に
そう思った。ぼやけてよく見えなかったのにそう思ったのはこ
の人から感じられる雰囲気のせいだと思う。

しなやかで細い手が差し伸べられた。私はその手を掴み立ち
上がった。

私の目の前にいる人はやさしくささやいた。

「おはよう。今日から君の名前は薔薇姫だ」

私がこの屋敷に来てから二ヶ月の時が過ぎ去っていった。
ここでの生活にも少しずつ慣れてきた。この屋敷の主はこの
辺り一帯を領土にしている大貴族ゼメクス・ヴィリジア様。大
貴族といっても私にはそんなに悪い人には見えないけど？

未だに私の記憶は戻らない。私は誰だったのか？

ゼメクス様に聞いても何も教えてくれません。でも私はそれ
でもよかった、今が幸せだったから。

「ゼメクス様、何かお飲み物をお召し上がりになりますか？」

「紅茶を頂けるかい？」

「畏まりました」

私はゼメキス様に紅茶を入れて差し上げると、ゼメキス様の元へ紅茶を運ぼうとしました。けれど。
「あつー!!」

ガシャーーン!! 紅茶を入れたカップは床に落ち砕けてしまいました。

「ごめんなさい、今片付けますから」

「薔薇姫がそんなことをする必要はない、後で他のものにやらせるからそのままにして置きなさい」

「いえ、私がやりますから 痛っ!!」

「大丈夫か!？」

私の指は陶器の破片で傷付き、見る見るうちに紅く染まっていた……私は、私は……。

「……血」

「薔薇姫?」

「いやーっ!!」

気が付くと私は暗闇の中にいた。

なぜ私はここにいるんだろう?

覚えてない……私……? 私って誰?

どうやら記憶喪失ってやつみたい。

なんだかさつきから私ってば冷静だなあ、こういう状況の時ってみんなこうなのかな?

まあいいや、そんなことより今は私の置かれている状況を把握するのが大切だよな。

ゴンー！ 痛い……動こうとしたら頭打っちゃった。どうやら箱の中で横になってるみたい。なんで私はこんな箱の中にいるんだろう。この箱は人が一人入れる位の大きさ、しかも私にピッタリ合う大きさに作られているような……まさかね、まさか枢なんてことはないよね。私死んだのかな？

「誰かいませんか？」

人のいる気配もないし、小さな箱の中で大声でしたら耳が痛くなっちゃった。

バンツッ！！ 箱はびくともしない。はぁ……仕方ないから寝ちゃお。

寝ていたので時間がどの位経ったのかわからないけど、私は目覚めた。

まぶたに強い光を感じた。眩しい……眩しいけど仕方なく目を開ける事にした。

私の目の前には誰かが立っていた。……綺麗な人だ、純粋にそう思った。ぼやけてよく見えなかったのにそう思ったのはこの人から感じられる雰囲気のせいだと思う。

しなやかで細い手が差し伸べられた。私はその手を掴み立ち上がった。

私の目の前にいる人はやさしくささやいた。

「おはよう。今日から君の名前は薔薇姫だ」

そうこれの繰り返し。

私が思い出してはいけない記憶を思い出す度にゼメキス様は私の記憶を消した。

私には特殊な能力がある。だから記憶を消されていた。その能力のせいで私はさらわれかけた……。

硝子の割れる音を共に部屋に突風が吹き荒れ、男は私の前に姿を現した。

白衣を纏った銀色で短い髪の男は悪魔のような笑みを浮かべていた。顔半分には獣の鋭い爪で傷つけられたような三本の爪痕が付いている。

「君が薔薇姫だね、迎えに来たよ」

男の後ろから五匹のゴブリンが現れ私を捕まえようとした。

大きな緑色の腕が何本も私に掛かる。私はどうすることもできなかつた。抵抗すらできなかつた。

「あなた方は何者ですか!？」

「僕の名はゼオス、君の能力を使ってこの世界いる全ての貴族を支配しようと考えている者だよ」

「私の能力を使って貴族を支配するですって!？ 私にはそんな能力なんてありません!！」

「それはゼメクスに記憶を消されているからだよ。強いシヨックを受けると記憶は戻るんだけど、すぐに奴は記憶を消すんだ。心当たりがあるだろ?」

この男に言われたように心当たりがある。この屋敷のこともゼメクス様のことも全てを私は前から知っていたような感覚に襲われることがある。でも私がここに来たのは二日前の筈、そう筈……。

その時突然、部屋のドアが音も無く開かれ音も無くゼメキス伯爵が現れた。

「薔薇姫を放せ」

放せと言われて放すような者たちではなかった。薔薇姫を捕らえているゴブリンとゼオスが逃走を謀ると同時に残りのゴブリンがゼメキス伯爵に襲い掛かった。

「こんな雑魚では相手にならんな」

私はゴブリンの腕に抱えられ夜の暗い森の中を運ばれていた。私はいつたいたどこに連れて行かれるのだろうか？

ゼオスの足が不意に止まり、彼は後ろを振り向いた。

「早いね、でも計算通り」

「私を誰だと思っっているのだ、大貴族ヴィリジア・ゼメキスを敵に回した事を後悔して死ぬがいい」

「後悔なんてした事が無い、されてもらえるならありがたい話だね、くくっ」

ゼオスの目の色が黒瞳から紅瞳に変わり、背中からは白衣を貫き漆黒の悪魔のような翼が生えた。

それを見たゼメキスの目は大きく見開かれ、顔付きが狂気の相を浮かべた。

「キサマ何者だ!？」

「くくく、貴族を支配する者だ」

「貴族を支配するだと、私たち貴族は絶対の存在だ。お前などに支配される筈がなかるう」

「それはどうか？」

何が起こったのか私にはわからなかった。ただ私が見たのはゼメクス様が倒れる姿。ゼメクス様がやられてしまった。

「くくく、大貴族も対したことないな……くはっ」

ゼオスが突然口から血を吐いた。その形相は悪鬼のようになり、腹からは槍が突き出ていた。

肩越しにゼオスは後ろを振り向いた。

「生きていたのか？」

「私を誰だと思っているのだ？」

そう言つて槍は引き抜かれ、槍は再びゼオスを襲い身体を肩からわき腹まで真つ二つに切り裂いた。

それを見たゴブリンは私のことを放して、血相を描いて闇の奥へと逃走してしまった。

自由になつた私はゼメクス様に駆け寄ろうとしたのですが

「くくく、この程度の攻撃で僕を殺せるとも？」

切り離された筈のゼオスの胴体は互いを引き寄せるようにくっ付き身体を起こした。起き上がった身体には傷一つ無い。

その光景を目撃したゼメクス伯爵は再び槍を振り下ろそうとしたが、ゼオスの動きのほうが早かった。

ゼオスの腕は伯爵の腹を貫いていた。

「お返しするよ」

「小癪な！！」

二人の戦いを見て恐くなつた私はこの場から駆け出した。

暗い森の中を走り、恐怖が私を包み込む。

行く当ても無い私の視線の先で小さな光が見えた。それは家の明かりだった。森の一角を切り開き、その中に立てられた家。私が自分で気付いた時には家のドアの前に立ちノックをしていた。けれど返事はなかった。誰もいないのだろうか……けれど明かりは点いている。

不思議の思いドアに手を掛けると扉が開いてしまった。扉を開けた瞬間、血の匂いが私の鼻をついた。

血まみれになり倒れている人々。女の子とその両親と思われる大人、モンスターか何かに襲われて殺されたに違いない。

「……う……う……助けて」

小さな声であったけれど私の耳にはしっかりと届いた。少女の声だ、少女はまだ生きていた。

私は少女の横で膝を突きその顔を見た。

「こんな可愛い子……可愛そうに助かる見込みは……」

私はこの時あることを思い立ちそれを実行した。

ここにいた者たち全ては目を覚まし身体をゆっくりと起こした。

どの位気を失っていたのかはわからない。だがここにいた者たちは全員同じモノを見ていた。

「今見て頂いたのは私の記憶です」

まだ少し痛みの残る頭を押さえながらジェイクとクインは目を大きく見開いた。

二人の目の前に立っていたのは、あの森で助けた少女ソフィ

アであつた。

「ソフィアさんがなんで!？」

「そうだソフィアがなんでこんなとこに!？」

目を白黒させる二人に対してゼロは質問を投げかけた。

「知り合いか？」

「この人は僕たちが森でゴブリンに襲われているところを助けてあげた方で」

「その彼女がなぜこんなところにいる？」

この問いに対してゼメキスもまた疑問を抱いていた。

「なぜ……いやそれよりも先程『今見て頂いたのは私の記憶です』と言っていたが……もしや!？」

「ゼメキス様、私は薔薇姫で御座います」

この発言に元から無口であるゼロを除いて全員が絶句し驚かされた。

まさかソフィアが薔薇姫であつたなど、ジェイクとクインには信じがたい事であつた。しかし、なぜソフィアが薔薇姫なのだろうか？

「私はこの身体に乗り移り、身を隠したのです。そのお陰で敵に狙われる事もなくここまで難なく来る事ができました」

そう薔薇姫は追跡者の目を眩ますために瀕死の重傷であつた少女に乗り移つたのだ。そして彼女はこの場に姿を現した。しかし何故？

「私は全ての記憶を取り戻しました。そして能力も……白騎士と黒騎士は敵の手に……もうすぐここに敵が来ます、そして私

は……」

「どうしてソフィアさん、いえ薔薇姫さん、もうすぐここに敵が来るとはどういうことですか？」

薔薇姫が答えを発しようとした刹那ゼロの言葉がそれを遮った。

「敵が来た」

ドアが強い衝撃によってぶち破られた。

ゴブリンの大群が部屋の中にどっと流れ込み、あつという間に部屋を占拠し取り囲まれてしまった。だがこの場で焦る者はただ一人とていなかった。

武器を手に取り敵を一掃する。勝負は呆気にとられてしまう程の大差である。もちろんやられたのはゴブリンたちである。

ゼロとゼメクス伯爵が敵の九割を難なく倒し、残りをジエイクが倒す。クインは物蔭から応援し、薔薇姫は？ 姿が見当たらない！

伯爵がそのことにいち早く気づき叫んだ。

「薔薇姫は何処だ！！」

その声に反応した残りの者たちは辺りを見回し、その視線は一点に集中された。

顔に傷を持った銀髪の男がそこには立っていた。

「くく、何たる偶然だろうね……SK-MIO、いやゼロと呼んだ方がいいかな？」

普段何事にも動じないゼロの表情がこの時ばかりは驚愕の色を浮かべた。ゼロを驚愕させた男は薔薇姫をさらおうとしたゼオスであった。しかし、なぜ？ ゼオスとゼロは知り合いなの

か？　そしてSK・MIOとはいったい？

「ゼオス……なぜキサマが!？」

「あれから四〇〇年以上も経つのに僕の顔を覚えていてくれるなんてうれしいね。君の噂は聞いていたよ、ハンターなんてものをやつてるそうじゃないか？」

しゃべりながら辺りを見回していたゼオスの瞳が一点に注がれ、驚愕した。

「ま、まさか!?　なぜだ!?　なぜ、メフィストと同じ、いや違う半分だけだ」

この言葉を掛けられた本人であるクインの顔色が変わった。メフィストとはいったい？

「あのひとの事をご存知で？」

クインの顔からは笑みなど一欠けらもない、失われている。クインがあの一と呼ぶメフィストとはいったい誰なのか？

「わけかんねえ〜!!！」

突然ジェイクは叫んだ。

「わけかんねえよ。なんなんだよいったいさつきつから、メフィストってクインの親父の事だろ？　あの変態親父がどうしたってんだ？　ゼロとこの銀髪ヤローとどういう関係なんだよ!!!　薔薇姫の能力って何だ!？」

この言葉を聞いたゼオスは腹に手を当て大笑いを始めた。

「くくく、くはははは、なんて偶然だ。この小僧が大魔王メフィストの息子だと、有り得ない。それにゼロか……薔薇姫の力は恐ろしいな」

かつて古に時代大魔王とまで呼ばれた妖魔貴族メフィスト・フェレス。しかし彼は突如魔王であることを辞め、とある研究所が謎の事故で炎上し、研究所はすぐに再建されたがその研究所にはメフィストの姿は無かった。メフィストは研究所を後にして忽然と姿をくらましてしまったのだ。彼の噂の中には人間の世界に溶け込み家庭を持ったなという信じがたい物もあるが真実であるかどうかは定かではなかった。しかし、それは現実であった。

ジェイクが発狂する。

「はあっ!? あのクインの変態親父が大魔王だと!」

以前ジェイクはメフィストに遭ったことがある。そして街中を追いかけられた思い出したくない記憶がある。しかし、あのメフィストが、『クイン愛してるよお〜』なんて言いながら息子に抱きつく男が大魔王であったなど誰が信じようか?

ここにいる者は全員個々に絶句し言葉を失っていた。全員が何らかのイトで繋がっていたのだ。

因縁を辿る力

因縁を紡ぐ力

しかし何故彼らはここに集められた？

それが因縁

第七章 因縁

始まりは過去に遡る。四〇〇年以上も昔、ゼロとメフィストはある研究所にいた。その二人の間に割って入って来た男がゼオスであった。彼はその研究所で事件を起こし、その際に姿をくらし、ゼロまでも姿をくらし、その後を追うようにメフィストまでもが姿をくりました。

そして、ゼロはいつしか伝説ハンターとして名を世界に轟かす存在となっていた。ゼロは当時ハーディックと呼ばれる男と一緒に仕事をしていた。そして、ゼロはハーディックと共にゼメクス伯爵の屋敷に乗り込み仕事をこなしたことがあった。そのハーディックの息子がジエイクである。そのジエイクは今回、彼の父親であるハーディックと同じ依頼を受けることとなった。クイン 彼はメフィストの息子であった。彼の父であるメフィストはゼロとゼオスと、ある因縁で繋がっている。しかし、今のところ役立たずのクインが大魔王とまで呼ばれた妖魔貴族の息子だったとは……。

ゼロの紅い目はゼオスをしっかりと見据えて放さない。

「ゼオス、何故キサマが？」

「僕は偶然を操る姫を頂きに來ただけだよ。彼女は無意識の内に偶然を操り、因縁を持つ者を引き合わせる能力を持つ。じつにおもしろい能力だろ？ その能力を上手く使えばきつと世界をこの手に……だからゼメキス伯爵、君は彼女の記憶を封じて能力までも封じたのだろ？」

「そうだ、偶然を操る能力などあつてはならん能力だ」
姿を消していた薔薇姫が突如風と共に姿を忽然と現した。

「そうです、私の能力を悪用されると大変な事になるでしょう。だからと言ってもう記憶消されるのも嫌です。どなたか私を殺してください」

ゼオスは冷やかな言葉を返した。

「それはできない、だろ？」

「その通りです。私は死ねない、偶然が私を死なせてくれない」

そう言った直後薔薇姫は短刀を取り出し自分の腹に突き刺そうとした。のだが、建物全体が大きく揺れた。地震だ、地震が起きたのだ。そして薔薇姫はバランスを崩した拍子に床に倒れ、短刀を手放してしまった。

床に落ちた短刀をゼオスは拾い上げ薔薇姫に投げつけた。がしかし、やはり短刀は薔薇姫に刺さることはなかった。短刀は薔薇姫にしていたペンダントに偶然に当たり床に落ちた。

「おもしろい体質だね。だからこそ僕は君を必要としているのだけだ」

ゼオスは薔薇姫に近づきその手を取った。

「さあ、僕と行こう」

「嫌です」

この言葉を合図に真つ先にゼロが剣を構え、ゼメキスは槍を構え、ジェイクも続いて剣を構えた。クインはというと、物陰に隠れて応援の準備をしていた。

ゼオスの手が薔薇姫の口元に当てられ瞬間、薔薇姫は深い眠りに落ちた。薔薇姫を眠らせた彼の身体に異変が起きた。瞳の色が黒瞳から紅へ、そして背中からは漆黒の翼が

「くくく、いくらでも相手になるよ掛かっておいで」

「遠慮なく行くぜっ！！」

真つ先にゼオスに刃を向けたのはジェイクであった。

切っ先で床を擦りながら翔け、剣を下から上へと振り上げる。剣は確実にゼオスを捕らえていた、がしかし剣は相手を切り裂くことはなかった。

「たかが人間が僕に刃を向けるなんて、身の程知らずとはこういう時に使う言葉なんだね」

剣はゼオスの手に握られていた。

「こんなナマクラな剣じゃ僕の皮膚一枚たりとも切れないよ」
剣を握った手からは血一滴たりとも零れはしない、それどころかゼオスは剣を強く握り締め粉々に砕いてしまった。

「！！」

次の瞬間ジェイクは羽ばたき突風を起こしたゼオスの翼に成す術もなく吹き飛ばされた。

間を空けず左右上空からゼロとゼメキス伯爵が武器を構え

オスに襲い掛かる。

双方から繰り出された攻撃を両手で受け止めた。ゼオスは軽々と相手の武器を掴み、そのまま腕を回転させ二人を武器ごと放り投げた。

片手片膝を床に付け着地した二人は同時に地面を蹴り再びゼオスに立ち向かった。しかしゼオスの力は壮絶絶対であった。

ゼオスの身体が音も無く地面を滑るように移動したかと思うと、残像が発生し瞬時のうちに二人を仕留めた。床に腹から叩きつけられた二人は武器を手放してしまい、すぐさま武器を拾おうとしたが見つかからない。

「探し物はこれかい？」

長い刃を持つ剣と装飾美しい槍はゼオスの手に握られていた。

ゼロの紅い瞳、そして蒼から紅へと変わったゼメキス伯爵の瞳がゼオスを無言で睨みつける。妖魔貴族の瞳の色が変化し紅に変わるのには感情が高ぶっている証拠である。しかし半妖であるゼロの瞳は元から紅かった。

ゼオスの紅い瞳とゼロの紅い瞳が互いを見つめ合う。

「ゼロ、君の目はあの時からずっと紅いままなのかい？」

「……………」

ゼロは何も答えなかった。代わりに彼はこれで答えた。

紅いマントを激しく揺らしながら拳に力を入れたゼロがゼオスに飛び掛かる。がしかしゼオスの前では無意味な行為と言えた。

ゼオスの身体は残像を起こし揺らめくように移動し、ゼロの

身体に何発ものパンチを繰り出した。後方に大きくゼロの身体は床に倒れ動かなくなった。

ゼメキス伯爵、そして物蔭に隠れるジェイクとクインの表情は明らかに曇っている。武器を失ったジェイクはクインと共に陰ながら応援をしていたのだ。

「ゼロさんがやられるなんて、ジェイクどうにかしてくださいよ！」

「俺にどうにかできるわけねえだろ。武器も壊されちまったし、おまえがどうにかしろよ」

うつむくクイン　そして彼は顔を上げスマイルを浮かべた。

「仕方ありませんね、どうかします。けど、どうかした後の処理は任せましたからね」

腕にはめられた瑠璃色のブレスレッドを握り締めながらゼオスの前に歩いて行くクイン。彼は何をする気なのか？

「僕がお相手いたします」

クインはブレスレッドに魔力を注入し砕いた。

「僕はこの血が嫌いで嫌いでたまらない、だからこの血には頼りたくなかった……」

クインの髪の毛がやわらかな風に巻き上げられ、彼の全身は優しく温かなオーラに包まれた。そして彼の瞳は漆黒の黒から、血のような紅へと変わった。

「僕も半妖です。でも人間との半妖ではありませんよ、もっと高貴な者の血が僕には流れています」

妖魔貴族である父を持つクインが妖魔の血を引いていることは

当然だった。しかもその血は大魔王と呼ばれた男の血と人間よりも高貴な存在の血であるという。

余裕のスマイルを浮かべるクインの顔つきは先程とは別人のようであった。彼は絶対の自信を持っている。

この時初めてゼオスはこの戦いにおいて恐怖した。彼を恐怖させた者はこれで二人目だった。

「親子揃って僕にこんな屈辱を与えるなんて……くくく、ゾクゾクするね」

そうゼオスに初めて恐怖という感情を抱かせたのはクインの父であるメフィストだった。

「ゾクゾクするだって？ その程度で済むと思っっているのか？ 凍りつかせてアゲルよ」

いつもの笑みとは違う笑みを浮かべるクインの手から閃光が放たれた。それはレーザービームのように真っ直ぐと伸び、ゼオスの肩を貫き左腕を丸々吹き飛ばした。レーザービームは容赦なくゼオスに発射される。右腕を吹き飛ばし、左右の足を吹き飛ばしゼオスの身体は胴体を残すのみとなった。

ゼメキス伯爵は戦慄を覚えた。役立たずだったクインは今、大貴族ヴイリジア伯爵に戦慄を覚えさせたのだ。

だが攻撃を受けた当の本人　ゼオスはなんとも言えぬ至福の笑みを浮かべているではないか！？

「くくく、メフィスト息子たるすばらしい力だ。いや、メフィスト以上かもしれない……まさに神をも恐れぬ力だ。けれど僕も神など恐れてはいない」

触手が伸びた。ゼオスの体の各部を吹き飛ばされた傷口から幾本もの触手が蠢きながら伸びたのだ。

触手はそれ自体が意志を持つているように動き、獲物を見つけた。

静かに眠る眠り姫に魔の手が襲い掛かる。触手は足に巻きつき、腕に巻きつき、身体を締め上げる。触手はついに薔薇姫の体全体を覆い隠した。

ゼメキス伯爵が走る。薔薇姫を救おうと床に転がるゼメキスの腕から槍を取ろうとした瞬間、突如腕から生えた触手がゼメキス伯爵の腕に巻きつき放さない。ゼメキスは触手を鷲掴みにしてむしり取るうとするが触手は驚異的な早さで再生し、やがて伯爵の身体を覆い尽くした。

伯爵を取り込んでしまった触手は奇怪な動きをして本体と融合された。本体は触手を何メートルも伸ばし巨大な怪物へと生まれ変わった。

胴体と顔を残して全てを触手で構成された全長六メートルの怪物の身体は常に波打つように蠢いている。

ゼオスは声を発した。しかし、その声はもはや口からは発せられていないのではない、身体全体から発せられていた。

「くくく、どうだい、すばらしい身体だろ？ 僕は昔生命科学研究所の研究者をしていた事があってね、これはその研究の成果。僕はもともと妖魔貴族と翼人とのハーフだったんだけど、それだけじゃ僕は物足りなかった。だから手始めにメフィストのDNAを取り込み、その後もうろろんな生物を取り込んでい

った。つまり僕と君とゼロは同じ者の力を持つ兄弟のようなもの」

「……ふつ。だからどうした？ 戦いは最後まで生きてた奴が勝ち、違つかい？」

紅蓮の炎が突如宙に現れ怪物目掛けて激突した。

「ぎぎやーっ！！」

幾本もの触手をのたうちながら燃え上がる怪物。しかし、

炎はすぐに消えてしまい怪物は黒焦げになり煙を上げている。

その黒焦げになった身体の皮膚には干上がった水辺のようにおびたらしいひび割れが生じた。それが剥がれ落ちるや中から新たな皮膚が現れ、触手はまた動き始めた。

「くくく、全身を炎で焼かれたのはこれで二度目だ。けど僕の皮膚は特別せいでね、炎は熱いが焼かれることはない」

「ならこれならどうだっ！！」

怪物の頭上で叫び声が上がった。ジェイクだ、怪物の頭上にいたのは槍を怪物目掛けて降下するジェイクだった。

槍はゼオスの胸に突き刺さった。突き刺さっただけではない妖魔の核を突き刺したのだ。妖魔には死という概念は無い、核さえ残っていれば長い年月はかかるだろうが再生は可能だ。だがその核を破壊されるとどうなるか？ 妖魔には『死』ではない、『消滅』がある。肉体は跡形も無く消滅し、精神すら残らない、無に還るのだ。妖魔はそれを恐れる。

槍を突き刺したジェイクは手を離し怪物の身体を蹴って後ろに飛び退く、そこに空かさずクインの雷系魔法が放たれた。

放たれた雷光は避雷針の代わりをした槍を通して怪物の核を直接攻撃する。

怪物の身体が大きく震えた。止まった。怪物の動きが止まった。

「終わったのか？」

ジェイクの眩きと共に怪物の身体は砂のように崩れ落ちた。

「……！！」

崩れ落ちた砂の中から現れたのは漆黒の翼を持つ一糸纏わぬゼオスが立っているではないか!? しかし、なぜ核を破壊された筈のゼオスが生きているのか？

「くくく、残念ハズレ、僕の核は一つじゃない。そしてさっきのはサナギだ。僕は完全にゼメキス伯爵と薔薇姫を取り込んだ」

「ならば、核を全て壊すのみだ」

この場にいた全ての者がその声を発した者 視線が刃丈の長い剣を持つその男に注がれた。紅き死神 ゼロの瞳は氷のように蒼く冷たかった。

「くくく、ようやくお目覚めかい、ゼロ？」

ゼロと呼ばれた男は口の端を上げ答えた。

「否、ゼロに在らず。私はカインだ」

ゼロの身体と顔を持つ男は自分のことをカインだと名乗った。しかし、カインと名乗った男はゼロ以外の何者でもない、果たしてどういうことなのか？

「どーゆーことだよ意味わかんねえよ」

「僕に聞かれても」

二人の若者は互いに顔を見合わせ、ゼロを見て反応がないと知りゼロを見た。

「おもいろい、くく、これがメフィストの実験の成果か……あと君の身体の中には何人貴族がいる？」

「返答する必要性が皆無だ」

疾風のごとく翔けるカインの剣が煌き空気を断ち切り、空間すら切った。

ゼロスの額から冷たい汗が流れた。彼は紙一重でカインの剣を避けたのだ。しかし、避けた筈の剣はゼロスの胸を切り裂き、一筋の紅い線を付けていた。

「君の攻撃はゼロの二倍……いや二・五倍、スピードもゼロ以上だ。けど僕には勝てない、なぜだかわかるかい？」

……この問いに答えるものはいなかった。

「僕は薔薇姫を取り込みその力を得た。そして彼女すら操れなかったモノを今や操る事ができる」

ゼロスの手は宙に伸び見えない何かを取った。

「君たちには見えないだろうが僕は今、時間の一部、もっとわかりやすく言うと歴史の一部を取った」

「……アカシック・レコード」

クインが小さく何かに怯えるように呟いた。彼は人間 いや、全ての生物が触れてはいけないモノを目の当たりにしてしまっただのだ。

宇宙の記憶と呼ばれることのあるアカシック・レコードとは、

この世界、全宇宙のありとあらゆる出来事、思想、知識、個人の感情までも過去と現在、そして未来にまでも記憶してある媒体であるという。その記憶を読み取ることのできる者は数が限られ、読み取るといつてもその膨大な記憶のほんのわずかしが読み取れなかったという。

ゼオスはアカシック・レコードを読み取れるひとりとなったのだ。

「この記憶にはこれからここで起こる事が書いてある。くくく、けど君たちには秘密だよ。今の僕は記憶を読み取る事しかできないけど、いつかアカシック・レコードを書き換える能力を身に付けてみせる。だから今日は退散するよ、でもおみやげは置いて行くよ、くははははは」

鋭く研ぎ澄まされた切っ先が胸に刺さる刹那、ゼオスの身体はその場から消滅し、ゼロの一刀は空を突いた。果たしてゼオスの置きみやげとはいったい何なのか！

ゼオスが消えてすぐクインは頭痛と吐き気に襲われ膝を突いた。彼の顔が見る見るうちに狂気の形相を浮かべ、歪んでいった。まさか、これがゼオスの残していったものなのか？

「……申し訳ありません……妖魔の力が……暴走し始めたみたい……です」

足が震え、手が震え、身体全体が局地地震に襲われたようにガタガタと震え出す。これは尋常ではない。

長剣の切っ先がクインに向けられた。

「二つに血のうち、妖魔の血の方が濃いようだな」

剣を構えるカイン。彼はクインと戦う気であった。

「やめろゼロ！！ 何する気だよ！！」

「否、私はゼロではないカインだ」

「はあ！ 今はそんなつこたいいだろ、とにかく剣をしまえよ！」

「それは向こうに言うがいい」

巨大な氷の刃が幾本も蒼き瞳のカインに向かって牙を向けた。

氷が音も無く木っ端微塵に粒子に空気中を漂う霧となった。

カインの剣技の成せる技だった。彼は氷の刃をただ剣で軽く撫でただけであった。それで氷を霧へと変えたのだ。

霧の中を移動する二つの影。二つの影が激突するや激風が巻き起こり霧を掻き散らし晴らした。そこにいたのは言うまでもない、カインとクインである。

カインの長剣とクインの作り出した魔力を結晶化して作った魔剣が互いの刃を交じ合わせ力と力の押し合いをする。どちらも一瞬たりとも力を抜くことはない。

二人の戦いをジェイクは指をくわえて見ていることしかできなかった。二人の間に割った入ったところで邪魔になり、最悪の場合は殺されるのオチだろう。

もどかしさでいっぱいになる。悔しくて、悔しくてたまらない、今の自分に何ができるといふのか？

がそんなジェイクの名をカインが叫んだ！

「ジェイク、キサマがどうにかしろ！」

「!？」

いきなりどうにかしろと言われても、今自分はそのことで悩んでいたのだ。そんな自分に何ができる？

「ジェイク早くしろ！」

カインの口調は先程より早くなっている。彼は焦っていた。カインはクインに押されているのだ。

「俺に何しろってんだ！」

「それでもハーディックの息子か！ ハーディックは精霊の加護を受けていた。キサマにもその力がある筈だ」

「そんな力ねえよ！！」

二人が会話をしている最中にもカインの身体は足を床に滑らせながら後ろに後退している。

「私が見たところ、この男には妖魔と精霊の血が流れている。

キサマの精霊の力をこいつに注入してやれば……」

「ちくしょー、わけわかんねえーよ！！」

ジェイクはクインの胸へ飛び込んだ。突然の突進にクインは押し倒されジェイクが上に乗った。

がジェイクはクインの服の襟首を掴んだまま何をしていたのかわからない。

「何をしている、早くしろ！！」

クインの顔は狂気の形相を浮かべ、鋭く伸びた悪魔のような爪でジェイクを切り裂こうとしたその時、ジェイクは大声で叫んだ。

「わかんねえよ！！」

奇跡は起きた。ジェイクの身体は金色に輝くオーラを発し、彼

の背中から水あめのように伸びた光は女性の形を象り宙で止まったかと思うと、クインの身体に一気に流れ込むように吸い込まれていった。

苦痛に歪むクインはジェイクを五メートルも跳ね飛ばした。

己の身体を抱きしめ床を転げ回るクインの顔はおぞましいまでに歪み苦しそうであった。そして、やがて動きを止めた。

「もしかして死んじゃったのか!？」

「安心しろ、息をして……」

バタン！ 後ろを振り返るとカインは床に倒れていた。

「だいじょぶかゼロ!？」

ゼロに駆け寄り息を確かめると、息はある。脈も正常だ。

「……まいった、どうすつかこれから?」

ジェイクはゼロとクインを担ぐと二人を引きずりながら屋敷の外へと出た。

屋敷を出たジェイクは屋敷を一望した。屋敷は初めて見たときよりも何百年も歳を取ったように見えた。

二人を抱え前を向き歩き出すジェイク。彼は決して後ろを振り返らない。

「……あのパンチヨになんて説明すつか?」

紡がれる因縁 完

ZERO 編

コード・ゼロ

白い、白衣を着た男はガラスのケースに身を寄り添わせていた。

「ああ、もうすぐだ、もうすぐ出してあげるからね」

白衣の男性は愛しいものを愛でるようにやさしく呟いた。

部屋の中はいろいろな実験器具や用途不明の機械類、そして、この部屋の大半を占める巨大なガラスケース。その中には生物らしきモノが液体の中に浮かんでいる。形はそれぞれで中には人間の形をしているモノもいた。

男が身を寄せているガラスケースの中に入っているのは裸の人間の子供のようだった。しかし、断定はできない。なぜならその子供の背中には漆黒のコウモリのような翼が生えていたからだ。人間の背中にはもちろん翼なんてものは生えていない、すなわちこの人間の子供のようなモノは人間ではないのだろうか？

「メフィスト、研究の方は順調かい？」

ガラスケースに身を寄り添わしていたメフィストが後ろを振り向くとそこには彼同様に白衣を身に纏った銀髪の男が笑みを浮かべ立っていた。

「ゼオスカ、ここに入つて来るなんて珍しいね」

「たまには昼食をいつしよにどうかと思つてね」

「食事か……もう二日も摂るのを忘れていた」

「君は研究に熱中するといつてもそうだね」

ゼオスは手を口に当て小さく声を出して笑つた。

生命科学研究所と呼ばれているこの施設ではありとあらゆる生命体の研究がされているのだが、その中にあるキメラ実験施設の研究の全権を任されているのがメフィストである。彼は研究に没頭すると、食事や睡眠を取らなくなるという癖がある。

彼には他にも変わった癖を多く持っており、マッドサイエンティストや変人の多い生命科学研究所の研究者の中でも彼の変わり者ぶりはここの施設の職員たちの中でも有名な話である。

「研究も軌道に乗り始めたので久しぶりに食事でも摂るか」

「もうだいぶ外の光に当たっていないだろ、外に食べに行く気はあるかい？」

「食堂で十分だ」

「そうか、仕方ない奴だなあ、まああその食堂は品揃えも味もいいからね」

「食堂で待つている、すぐに行く」

「そうかい、じゃあお先に」

ゼオスはそう言うとう右手を軽く挙げてあいさつをしながらこの部屋を後にしていった。

ゼオスが部屋を出て行ったのを確認したメフィストはまたガラスに向かって話はじめた。

「もうすぐ君はここから出れるよ、ゼロ」

ゼロというのはこのガラスケースに入っている男の子のような生物の通称で、正式名はSM-100という。

「ボクは昼食を摂ってくるけど、元気に待っているんだよ」

メフィストはガラスケースにキスをしてこの部屋を後にした。

この研究所にある食堂は他の部屋同様、金属の壁で四方を囲まれテーブルがぼつんぼつんとあるだけのとても質素なものであったがメニューの品揃えと味は大したもので一流言ってもいい。一流な訳には理由が存在する。この研究所の職員の殆どは一年中外出することがあまりない、そのため職員を飽きさせないため品揃えと味がいいのだが、そのことを褒める研究所職員は少数で、ようするにここの変わり者の職員達には味も品揃えも、どうでもいいということだった。

ゼオスがテーブルに着き料理が運ばれて来るのを待っていると、程なくしてメフィストが食堂に姿を現した。

「やあ、メフィスト待ちくたびれてしまったよ」

「それは失礼」

そう言うと彼はプラスチック製の椅子を引き席に着席した。

「メフィストは何を食べるんだい？」

「私は水で結構」

「それでは、こここのひとに悪いだろう、赤ワインなんてどうだい？」

「好きにしる……それにだこはオートメーションだ」

そう言われるとゼオスはテーブルの端にあるディスプレイを操作し始めた。

「うーん、僕はパスタとサラダにでもするか……」

ゼオスはテーブルに取り付けられたディスプレイを指でピツピと押すと、すぐさま料理をヒト型アンドロイドが運んで来たと、この食堂は全てオートメーション無人で作業が行われていて、格テーブルに取り付けられたディスプレイから注文をし、その注文に応じた料理をアンドロイドが運んで来ると仕組みになっている。料金については利用者がこの研究所関係者に絞られているため無料となっている。

ゼオスは血のように赤いワインのグラスを手に取り、グラスを斜め上に掲げた。

「それでは二人の実験にでも乾杯しようか。乾杯」

「……………」

メフィストはゼオスの乾杯の合図に無反応で答えた。

「そんなことじゃ、友達できないよ」

「そんなものはいらん」

この後もこのような会話が幾度と無く続いた。そんな中珍しくメフィストの方からゼオスに話し掛けた。

「なぜ君はいつも私に付きまとう？」

そう、ゼオスはこの研究所に来て一ヶ月となるのだが、それ以来彼はいつものようにメフィストに付きまとうている。

「それは僕が君のファンだからさ」

「ファン？」

メフィストは目を細めた。

「メフィスト、君は僕の知る一番の科学者だ。正直僕は君を尊敬している」

「それが私に付きまとう理由か？ ……理解不可能だ」

「科学は出来てもヒトの感情はわからないらしいね」

「私はヒトではない、妖魔だ」

「でも僕の何百倍も生きてるんだろ、ヒトの感情ぐらい理解してもらってもいいと思うけどな」

「何十倍だ。それにそういう君も妖魔と何かのハーフだろ」

「何だバレてたのか」

「私に近づきすぎた」

妖魔メフィストの名は遙か昔、妖魔を統べる残酷無慈悲の魔王としてその名を轟かしていた。しかし数百年前から彼は魔王を突然辞め何かに取り憑かれたようにある研究を始めたのだ。た。

「近づいただけで僕がハーフだとわかるなんてすごいね。さすがは魔王と呼ばれていただけはあるね」

「過去のことだ」

メフィストはグラスに口を付け、ゼオスとは視線を合わせなかつた。

ゼオスの熱い視線がメフィストの目を凝視する。

「でも、何で魔王とまで呼ばれた君がその地位と名誉を捨てこんな研究所で？」

「それが私に近づいた本当の理由か？」

「ああ、そうだよ」

ゼオスは不敵な笑みを浮かべた。それに反応してかどうかはわからないがメフィストも不敵な笑みを浮かべた。

「物好きだな」

「妖魔は物好きが多いだろ、僕もその血を半分受け継いでいる」

「……研究が気になる」

メフィストは少し間を置いて、席を突然立ち上がった。

「恋人が気になるのかい？」

「……………」

メフィストは無言だった。しかし、その瞳は蒼色から血のような紅に変わっていた。瞳の色が変わるのは妖魔の特徴の一つで、その瞳の色が変わるのは感情が高ぶっている証拠であるという。

メフィストの瞳はすぐに元の色に戻り、彼は無言でこの場を後にした。

月日は経ち、メフィストの研究はある生命体を生み出した。

メフィストの研究は研究所職員の間を丸くさせた。なぜならば、その者たちは信じられない、ありえない光景を見たからだ。

メフィストが『子供を連れて歩いている』。これはじつに信じがたい光景だ、人との関わり合いを只でさえ嫌うメフィストが誰かと一緒にいることでさえ珍しいことであるのに、それに加えその者とは四六時中、それも子供であるということがより一層人々を驚愕させた。

しかし、この子供は普通の子供ではない、メフィストの作り出した『キメラ（合成生物）』だ。メフィストが何のキメラを作ったのかを知るものはいない、それを知るのはメフィスト本人だけだろう。その子供の容姿は人間の少年の背中にコウモリのような翼が生えており、瞳の色は蒼く氷のようである。この瞳はある者たちの瞳によく似ている、そう妖魔貴族たちの瞳に……。そのことからこの子供は妖魔と何かのキメラではないかと噂されている。

メフィストは小さな子供と一緒に研究所の食堂で食事を摂っていた。食堂を使っているのはこの二人だけである、いつもメフィストが食堂を使うときは、他の職員たちは席を立ち退き、この場に近づかない。好き好んでメフィストに近づく者はこの研究所には彼しかない。

食堂にゼオスが姿を現した。

「やあメフィスト」

ゼオスは片手を軽く挙げると、そのままその手でメフィストたちの座る席の椅子を引きメフィストたちと同席した。

「二ヶ月ぶりかな、ねえメフィスト」

ゼオスは肘をテーブルに着き身を乗り出し、メフィストを見つめたがメフィストの反応は至ってつまらないものだった。

「妖魔である私には二ヶ月など一瞬だ」

「僕は二ヶ月の間ずっと研究室にこもりつきりだったよ、もううんざりだね」

「この生活が合わないのなら出て行けばいい」

「連れないねえ、君がいるから僕もいるんじゃないか」

ゼオスはそう言いながら横目でチラツと子供を見た。子供は少し怯えたような表情をしている。

「この子が噂のキメラかい？」

「コードネームSK-100」

「ふ〜ん、だからゼロ君なのか。よろしくゼロ君」

ゼオスはゼロに手を差し伸べ握手をしようとしたが、ゼロは怯えて手を出そうとしない。

「嫌われたかな？」

「誰にでもこうだ」

「それは良かった僕が嫌われているわけじゃないんだね。ところでそれは何？」

ゼオスが指を指した先はゼロの肩の辺りである。ゼロの肩の辺りから剣の鞘のような物が見えている。ゼオスはこれのことを聞いたのだ。

「……………」

ゼロは何とも言えない物悲しげな表情で、ただゼオスのことを見つめるだけで口を開こうとはしない。

「この子しゃべれないのかい？」

「しゃべりたくないだけだろう」

「ふ〜ん、そうなんだ」

メフィストが突然席を立った。

「ゼロ、行くぞ」

メフィストがゼロにやさしく手を差し伸べるとゼロはその手に
掴まり立ち上がった。

「もう行っちゃうのかい？」

ゼオスがこう聞くとメフィストは、

「研究がある」

と言ってこの場を後にしようとした。

「待ってよ、まだ食事の途中だろ」

そう言うゼオスが指を指している先には食べかけの料理が置いてあった。

メフィストはそんなゼオスの言葉など無視するかのよう
に部屋を出て行った。その時ゼロは、ゼオスに小さくお辞儀
をしてメフィストの白衣を掴むとゼロと一緒にこの部屋を後に
行った。

ひとり食堂に取り残されたゼオスは目を閉じながらゆっ
くりと背もたれに寄りかかり、深く息をついた。

「また、フラれちゃったな……今はゼロの方が可愛いのか……
くはは」

ゼオスが突然笑い始めた、その瞳からは涙が止め処なく流
れている。

「あははは、……人間とメフィストのキメラか」

ゼオスの瞳の色は血のように紅い。

「……確かにゼロは殺したいほど可愛いけどね」

次の日の深夜遅く、ゼオスの研究室にメフィストが突然姿を

現した。

メフィストの表情はいつもとなんら変わらない。だが、瞳の色は血のように紅かった。

「やあ、君が僕の研究室を尋ねて来てくれるなんて初めてではないかい？」

ゼオスは笑顔を浮かべメフィストを見つめた。

「ゼロを何処にやった？」

メフィストの声が冷たく鋭い氷のように響き渡った。

「行き成り尋ねてきて、『ゼロは何処にやった？』だなんて聞かれても困るよ」

「惚けるな、外の騒ぎもキサマのせいだろう？」

「外の騒ぎ何のことだい？」

「大勢の職員が惨殺されゼロの姿が消えた、研究所のシステムは破壊され火災から爆発まで起こっている」

「そうなの!? それは大変だ、ずっとこの中にいたから気付かなかったよ」

ゼオスの口調からは大変さなど微塵も感じられなかった。

「惚けるのは止める、気付かなかった？ この研究所に残っているのは私とキサマだけだ」

「みんな白状だな、僕を残して逃げるなんて……くくく」

ゼオスは突然腹を抱えて笑い出した。

「何がおかしい？」

「もうすぐ、この研究所は火の手に包まれ跡形もなく消えてなくなる、そして僕らも一緒に死ぬんだ。あはは……愛する人と

心中できるなんて嬉しいじゃないか」

「ゼロはどうした？」

ゼオスの目つきがこの言葉によって一瞬にして変わる。

「まだ、昔の恋人のことが気になるのかい？ 君には僕がいるじゃないか、君は僕だけのものだ！！」

メフィストはゼオスに近づき、ゼオスの首を鷲掴みにしてそのまま壁に叩きつけた。

「何度も言わせるな、ゼロをどうした？」

「くくく、可愛い可愛いゼロくんは僕の手によって内臓をえぐられてダストシュートの中にポイってね」

ゼオスの首を掴む手にはより一層力がこもりメフィストの指の間から紫色の血が滲み出す。

「キサマは自分のしたことがわかっていいるのか？」

「く、くくく、くははははは………終わりだ、全て終わりだ」

「終わるのはキサマだ」

「終わるのが僕だと………こんなにも君のことを愛しているのに？」

ゼオスはメフィストの手を振り払いメフィストに襲い掛かろうとした。そのとき、ゼオスの伸ばした右手が突如消失した。

「くはっ………」

ゼオスは消失した手が在った部分を押さえながら床に転げ回った。

「くははは、まだ、生きていたのかSK-M00」

ゼオスの目線の先には長剣を持って彼を燃えるように紅い眼差

して見下ろすゼロの姿が……。

「……終わりだ」

「くくく、今始まった」

ゼオスはそう言うと言葉にポケットから注射器を取り出し自分の腹に突き刺した。すると、突然ゼオスの身体の中で何かが奇怪な音を立てながら蠢き始め、それが治まると背中から漆黒の翼が生え、切り取られた筈の右手が生え、瞳の色が血のような紅に変わった。

ゼオスはゆっくりと立ち上がり、それと同時にまばゆい光を放った。ゼロとメフィストはその瞬間、衝撃波のようなものに吹き飛ばされ、壁に叩きつけられた。

「さあ、これが始まりだ」

壁に叩きつけられたメフィストであったが、その表情は何一つ変えなかったが何が起きたのか、どんな恐ろしいことが起きたのか彼には瞬時にわかった。

「ゼオス、誰のDNAを注射した？」

メフィストはゼオスにこう問うた。しかし、『誰のDNA』とはどういうことなのか？

「君の研究を参考にさせて貰ったよ」

突然ゼロがゼオスに斬りかかった。しかし、ゼロの腕は簡単に掴まれひねられ動きを封じられた。

「放せ！」

ゼオス是不敵な笑みを浮かべ、掴んだゼロの腕をへし折った。鈍い音が鳴り響く。

メフィストの眉が少し上がった。

「どうだいメフィスト、恋人の腕を目の前で折られる心情は？」

メフィストの瞳が蒼から紅に変わり、この場の空気が、ぎんと凝結した。

「そんな瞳で見つめるなメフィスト」

そう言うとゼオスはゼロの漆黒の翼を二つとももぎ取りゼロを壁に思いつきり投げつけた。それを見たメフィストはもの凄いスピードでゼオスに襲い掛かった。

「メフィストともあるう者が頭に血が昇ったかな？」

ゼオスは襲い掛かるメフィストの懐に入り込み、メフィストの顔を鷲掴みにしてそのまま壁に叩きつけた。

ゼオスの指の間から蒼い血が滲み出したと思うと、メフィストの右手が音もなく動き、ゼオスの腹を貫いた。

「ぐはっ！」

メフィストの左手がゆっくりと動き自分の顔を鷲掴みにしているゼオスの手を振り払った。

メフィストの顔は血で汚されていたものの傷一つなかった。

傷は妖魔の超人的な回復能力によって瞬時に回復してしまったのだ。

「腕を抜いてくれないかな？」

腹を突き抜かれたゼオスであったが今の言葉からはそんなことなど微塵も感じさせなかった。

「誰のDNAだ？」

「その前に腕を抜いてくれるかい？」

「私のDNAだな？　そして、キサマは性格にはハーフでは無かった。幾つの生物を取り込んでいる？」

メフィストはゼオスの内臓器を鷲掴みにして腹の中でかき混ぜた。

ゼオスの口から血が玉が頬を伝って零れ落ちる。しかし、彼の顔は笑っていた。

「僕と君は一つにやっとなれた、こんな嬉しいことはないよ」
ゼオスは笑いながら泣いている。

「私はここにいます」

「だいじょうぶだよ、もうすぐ君は僕の中だけで生きることになるんだから」

そう言うとゼオスは自ら腹に突き刺さるメフィストの腕を抜き、そのままメフィストの腕をもぎ取った。しかし、メフィストは取り乱す気配もない、至つて冷静でその言葉は冷たい。

「やはり終わるのはキサマだ」

「!？」

メフィストの視線はゼオスではなく、その後ろを見ている。そして、ゼオスの身体は肩から下に斜めに切り裂かれた。

ゼオスの身体は二つに裂け地面に転がり落ち、紫の血が床に広がる。その上に立っていたのはゼロだった。

ゼロの持つ剣の先からゼオスの血が地面に滴り落ちる。そしてゼロは剣を替えて、何度も何度もゼオスの身体に突き刺した。その度にゼオスの身体が震える。ゼオスの息はまだある、

まだ死んではいない、メフィストのチカラを身体に取り込んだ
ゼオスの生命力は身体を二つに裂かれてもなお尽きることはな
い。しかし、肺を切り裂かれて声を出すことはできない。

「もういい」

メフィストがそう小さく呟くと、ゼロは剣を床に落としそのま
ま剣と共に床に倒れこんだ。

メフィストはゼオスに近づき、上から見下ろしてこう言った。
「妖魔には死という概念は無い、核さえ残っていれば長い年月
はかかるだろうが再生は可能だ。だがその核を破壊されるとど
うなるかはキサマにもわかるな？ 妖魔には『死』ではなく
『消滅』がある。肉体は跡形も無く消滅し、精神すら残らない、
無に還るのだ。妖魔はそれを恐れる」

ゼオスの身体はメフィストが話している間に元通りに戻って
いた。

メフィストはゼオスの首を鷲掴みにして、そのまま上に持ち
上げた。

「しかし、世の中には例外というものが存在する」

メフィストの手が高く上げられ、そのままゼオスの顔に振り下
ろされた。

ゼオスの顔半分にはメフィストの爪の後がくつきりと刻まれ
血が滲み出している。

「その傷は決して癒えることはない、血は止まるだろうが傷跡
は残り痛みが永遠に付きまとう」

メフィストが手を離すとゼオスの身体は人形のように崩れ落ち

地面に膝を突いた。

炎の魔の手がついにこの部屋まで伸びて来た。炎は一瞬にして辺りを包み込み、建物が倒壊し始めた。

「行くぞゼロ」

メフィストは床に倒れこんでいるゼロに手を差し伸べたがゼロは手を伸ばそうとしない。

「……行かない」

「何を言っている？」

「ここで死んだ方がいいんだ」

メフィストは無理やりゼロの手を掴もうとしたが、ゼロはそれを振り払って突然炎の中に飛び込んで行った。

「ゼロ！！」

メフィストはゼロを追いかけようとしたがすぐに見失い、そのうえ彼を行かせまいとゼロスがメフィストの身体にしがみ付いた。いや、抱きしめた。

「ふふ、メフィスト僕と一緒にここで死のう」

メフィストはゼロスを振り払い、ゼロを追いかけようとするがゼロスはメフィストを逃がすまいと渾身の力を込めてメフィストの身体を抱きしめる。

「炎の中じゃいくら妖魔でも核を焼かれ塵と化す」

「黙れ！！」

メフィストはゼロスを振り払い炎の中へと飛び込んで行った。

「くくく……最期までフラれっぱなしか……あははは……」

ゼロスの身体は炎の渦の中へと吸い込まれて行った。

建物は全壊して焼け焦げた匂いが辺りに充満する。

メフィストは灰となった建物を見つめている。その眼差しはとても物悲しく切ないものだった。

ゼロのことを炎の中で懸命に探したが、結局見つからずメフィストは己の無力感に苛まれた。

ゼオスに殺害された研究所職員たち、研究所の火災や爆発で死んで逝った者たちの遺体は少しだが回収された。だがその中にはゼロの遺体はなかった。ゼロの生死すらわからない。

この事件あと研究所はすぐに再建されたがその研究所にはメフィストの姿は無かった。メフィストは研究所を後にして忽然と姿をくらましてしまった。彼の噂の中には人間の世界に溶け込み家庭を持ったなという信じがたい物もあるが真実であるかどうかは定かではない。

ゼロの生死はあの事件から四〇〇年以上という長い月日流れた今でも未だわかっていない。だが、今この世界には伝説として全世界に名を轟かす一人のハンターがいる。『紅い死神』と呼ばれるそのハンターは今この時も世界のどこかで活躍しているに違いない。

ハンターゼロ……。その名を知らぬ者はこの世界にはいないだろう。